

323

501



始





100

寫本  
仲  
之  
葉

8. 8. 26







これらの點に着眼して入學試験に關係の最深い、孟子、論語、中庸、大學、唐宋八家文、十八史略、言志錄、日本外史、雜（韓非子、小治、資治通鑑、史記、管子、家語、後漢書、文選）等から多量の問題、少きは數題、最特徴ある問題を選出し、各問題の上欄には註を附し、問題の次には問題に返點及送假名を附したるもの次には註を交文に讀み下したるもの次には解答、次には問題中の重要語句を含むだ他の文を應用として出し、應用の解は各部の終に附し、終末には過去數年の高等諸學校の入學試験問題及び解答を附し、最後に重要なる故事熟語を五十音順に排列した。

倒裝法や反語等の文法上

ついで答も般生徒の最生

必要な部分

層詳解を附して

よつて少な

になれば著者の満足する

漢文詳解の序



漢文詳解研究の力目次

# 漢文詳解研究の力目次

孟子之部	一五〇
應用問題孟子之部解答	四
論語之部	四七
應用問題論語之部解答	七
中庸之部	九四
應用問題中庸之部解答	四
大學之部	五三
應用問題大學之部解答	六
唐宋八家文之部	八七〇

目次



應用問題唐宋八家文之部解答……………一八九

○十八史略之部……………一四三

應用問題十八史略之部解答……………二四二

言志錄之部……………二四八

應用問題言志錄之部解答……………二五三

日本外史論文之部……………二六十一

應用問題日本外史論文之部解答……………二六二

雜之部……………二六十四

應用問題雜之部解答……………二六九

英文精讀初級の目次

故事熟語之部

アの部……………一

イの部……………二

ウの部……………六

エの部……………七

オ、カの部……………九

キの部……………二二

クの部……………二五

ケの部……………二六

コ、ノの部……………二八

サの部……………二九

シの部……………三三

ス、セの部……………三六

ソ、タの部……………三九

チの部……………四三

---

ツの部……………四七

テの部……………四八

トの部……………五八

ナ、ニ、ヌ、子、ノ、ハの部……………五九

ヒの部……………四二

フの部……………四三

ヘの部……………四六

ホ、マの部……………四七

ミ、ムの部……………四八

メ、モ、ヤの部……………四九

ユ、ヨの部……………五〇

ラ、リの部……………五一

ル、レの部……………五二

ロ、ワの部……………五三



入學試験問題及解答之部

大正六—九年度高等學校入學試験問題……………一—四

同……………解答……………五—二

同……………東京高等師範學校入學試験問題……………一四—七

同……………解答……………一八—二〇

同……………各醫學專門學校入學試験問題……………二一—六

同……………解答……………二九—三二

同……………海軍各學校入學試験問題……………三三—表

同……………解答……………三七—四一

同……………東京商科大学入學試験問題……………四三—四四

同……………解答……………四六—四七

目次終

# 漢文詳解研究の力

## 孟子之部

○備註  
 備……死人と  
 緒……葬とせんま  
 い仕掛の木偶。

○乎……この終  
 詞があるの  
 反語となるの  
 である。

これは悪い例を  
 開けば後にはそ  
 の悪いことが益  
 々はげしくなる  
 ことをいふたの  
 である。

仲尼曰。始作俑者。其無後乎。爲其象人而用之也。

返點附本文  
 仲尼曰。始作<sup>ムシノコ</sup>俑者<sup>ハ</sup>。其無<sup>レ</sup>後乎<sup>。</sup>爲<sup>ニ</sup>其象<sup>ノ</sup>人而用<sup>ス</sup>之也<sup>。</sup>

讀方 仲尼曰く。始めて俑を作る者は、その後なからんや。その人に象りて之を用ふるがためなり。

解答 孔子が死人と一緒に葬るぜんまい仕掛で手足を動かす木偶を作れば、後に人を殉死に用ふるやうになるかも知れぬ。これはその木偶は人間のかたちをかたどつて用ひるからで



ある」といった。

應用 可謂孝乎。

問 題

【二】 挾太山以超北海。語人曰。我不能。是誠不能也。爲長者折枝。語人曰。我不能。是不爲也。非不能也。

返點附讀方

- 挾……かまひて
- 超……とびこえる
- 長者……年長者
- 折枝……按摩する
- 非……能レ之

挾太山以超北海。語人曰。我不能。是誠不能也。爲長者折枝。語人曰。我不能。是不爲也。非不能也。

讀方 太山を挾み以て北海を超えんとす。人に語つて曰く、我能はずと、是誠不能はざるなり。長者のために枝を折る。人に語つて曰く、我能はずと、これ爲ざるなり、能はざるにあらざるなり。

解 太山を膝に抱へて北海を膝び越えやうとして「自分にはとてもできん」といふのは、實

際いふ通り出来ぬことである。目上の人も按摩をするときに、人に向つて「自分にはとても出来ない」と云へば、その人に按摩をする氣がないので、やる氣があれば出来ないのではない。

問 題

【三】 今王發政施仁。使天下仕者皆欲立於王之朝。耕者皆欲耕於王之野。商賈皆欲藏於王之市。行旅皆欲出於王之塗。天之欲疾其君者。皆欲赴愬於王。其如是。孰能禦之。

返點附本文

- 仁……なまけ
- 商賈……一體は商家に店を開いて居る商人であるが後にはその區別なくなり、こゝも「商賈」で「商人」の意に用ゐたのである。
- 行旅……旅人
- 孰能禦之……誰か問代名詞「孰」を反語として用ゐたのである。

今王發政施仁。使天下仕者皆欲立於王之朝。耕者皆欲耕於王之野。商賈皆欲藏於王之市。行旅皆欲出於王之塗。天下之欲疾其君者。皆欲赴愬於王。其如是。孰能禦之。

讀方 今王政を發し仁を施さば、天下の仕ふる者皆王之朝に立たんと



「だれがとめる  
ことができよう  
か」とめることは  
「商來ない」の意

欲し耕するもの皆王の野に耕さんと欲し、商賈皆王の市に藏めんと欲し、行旅皆王の塗に出でんと欲し、天下のその君を疾まんと欲するもの、皆王に赴趨せんと欲せしむ。それかくの如くば、孰れかよく之を禦めん。

解答 今あなたが仁政を布くならば、世の中の仕官を求める人々は皆あなたの朝廷に仕へたいと思ひ、農夫は、皆あなたの國の農民となりたいと思ひ、商賈をする人々は皆、あなたの國の市場に商品をもつて行きたいと思ひ、旅人は皆あなたの國の道路を通りたいと思ひ、世中の自分の君主に不平のあるものは皆あなたに訴へに行かうと思ふ。かやうになつたらば、何人もあなたに天下の實權の歸することをとめることはできないのである。

應用 孰不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>禮<sup>ニ</sup>

問 題

【四】無恆産。而有恆心者。惟士爲能。若民則無恆産。無恆心。

○恆産……生活を

たすけるための  
一定の産業

○恆心……一定不  
變の心

○士……學問あり  
道理の解つた人

○民……一般の人

返點附本文

無<sup>ニ</sup>恆<sup>ニ</sup>産<sup>ニ</sup>。而有<sup>ニ</sup>恆<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>者。惟<sup>ニ</sup>士<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>能<sup>ニ</sup>。若<sup>ニ</sup>民<sup>ニ</sup>則<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>恆<sup>ニ</sup>産<sup>ニ</sup>。無<sup>ニ</sup>恆<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>。讀方 恆産なくして、恆心あるもの、惟士のみ能くするをなす。民のごときはは則ち恆産なければ恆心なし。

解答 生活をたすける一定の産業がなくても、一定不變の心を保つて、貧賤のため心が亂れて邪道に踏み迷ふことのないのは、學問あり、道理に明らかな人のみであること、一般の人民などは生活をたすける一定の産業がなければ、貧賤のために心が亂れて邪道に踏み迷ふのである。

應用 士爲<sup>ニ</sup>知<sup>レ</sup>己<sup>者</sup>死<sup>ニ</sup>

問 題

【五】王欲行<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>。則<sup>ニ</sup>壹<sup>ニ</sup>反<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>矣。五畝之宅。樹<sup>ニ</sup>之以<sup>ニ</sup>桑。五十者可以衣帛矣。雞豚狗彘之畜。無失其時。七十者可以食肉。百畝之田。無奪

○壹……「なんぞ  
何をせざる」と  
かへつて再讀す



- 狗彘……犬豚
- 時……適當な時
- 八口之家……八人暮しの家
- 庠序之教……學校教育
- 申之……その上
- 孝悌……「孝」は親に對する道を「悌」は兄に對する道をつくすこと
- 頽白者……白髪まじりの翁
- 負戴……背負つたり頭に戴せて運ぶこと

其時。八口之家可以無飢矣。謹庠序之教。申之以孝悌之義。頽白者不負戴於道路矣。老者衣帛食肉。黎民不飢不寒。然而不王者未之有也。

返點附本文

王欲行之。則盍反其本矣。五畝之宅。樹之以桑五十者可衣以帛矣。雞豚狗彘之畜。無失其時。七十者可食肉。百畝之田。無奪其時。八口之家可以無飢矣。謹庠序之教。申之以孝悌之義。頽白者不負戴於道路矣。老者衣帛食肉。黎民不飢不寒。然而不王者未之有也。

讀方 王これを行はんと欲せば、則ち盍ぞその本に反らざる。五畝の宅之に樹うるに桑を以てせば、五十の者以て帛を衣るべし。雞豚狗

○黎民……人民

彘の畜、其時を失ふ無くば、八口の家以て飢うるなかるべし、庠序の教を謹み、之に申ぬるに孝悌の義を以てせば、頽白の者、道路に負戴せず。老者帛を衣、肉を食ひ、黎民飢えず寒せず。然り而して王たらざる者、未だこれあらざるなり。

解答 あなたがもしこれを實行しようと思へば、なぜその根本に立ちかへらないのであるか。五畝の住居に桑を樹えれば、五十歳のものが帛の衣服を着るのに充分である。雞や豚、犬や農などの畜養家畜を飼ふ場合に適當な時に従つて殺しなれば、七十歳のものが甘い肉を食ふことが出来、百畝の田地をもつて居るものはたらく時を如上の方でつかふやうなことをしなければ八人家内の家でも飢えるやうなことはあるまい、學校の教育を謹んでし、その上親に對して孝行をつくし、兄に對して之に對する道をもつてつかへるやうに民を導けば、民の人情が手厚くなつて、白髪まじりの翁が道路でものを運ぶやうな辛い仕事をしなくてもよくなり、年寄は軟い帛の衣服を着、旨い肉を食ひ、人民は飢えるやうなことなく、衣服がなくて凍えるやうなことがない。このやうに下をよく治めて王として立つことのできなかつたものはこれまでにないのである。



應用 蓋各言爾志

問 題

○惡……「あゝ」……  
歎息の言葉  
○夫子……先生  
○仁……道徳上最  
上の徳  
○聖……神變測ら  
れざるもの

【六】惡是何言也。昔者子貢問於孔子。曰夫子聖矣乎。孔子曰。聖則吾不能。我學不厭。而教不倦也。子貢曰。學不厭。智也。教不倦。仁也。仁且智。夫子既聖矣。夫聖孔子不居。是何言也。

返點附本文

惡は何言也。昔者子貢問於孔子。曰夫子聖矣乎。孔子曰。聖則吾不能。我學不厭。而教不倦也。子貢曰。學不厭。智也。教不倦。仁也。仁且智。夫子既聖矣。夫聖孔子不居。是何言也。  
讀方 あゝこれ何の言ぞや、昔者子貢孔子に問ひて、曰く夫子聖なるかと、孔子曰く、聖は則ち吾能はず、我學んで厭はず、教へて倦ま

ざるなり。子貢曰く、學んで厭はざるは智なり、教へて倦まざるは仁なり。仁且智。夫子既に聖なり。それ聖は孔子すら居らず、これ何の言ぞや。

解答 一體これは何といふ言葉であるか、昔子貢が孔子に「あなたは神明不測の聖といふ域にまで修養されたか」とたづねた。孔子は「聖といふ域にまでは自分は達することばかりでない、只自分は勉強する場合にあきることなく、人を教へる場合にいやになることがないのである」と答へた。子貢はそれを聞いて「學問してあきることのないのは事理に明らかかな證據である。人を教へていやになることのないのは心の徳の修つた證據である。事理に明らかかな上に、心の徳が修つて居れば、あなたは既に聖の域に達して居られる」といつたことがある。そのやうにあの勝れた孔子さへも聖をもつて自ら任じなかつたのである。それに自分如きものを聖などといふのは一體何といふことであるか。

應用 夫子至於是邦也、必聞其政

問 題



○豈……哉……疑問代名詞「豈」を反語として用ひ「哉」といふ終詞を連用したるものである

○類……水溜

○類……一類

○按……其萃……その中から秀でたもの

○自……生民……以來……人類ができて

○自……生民……以來……人類ができて

【七】有若曰。豈惟民哉。麒麟之於走獸。鳳凰之於飛鳥。泰山之於丘垤。河海於行潦。類也。聖人之於民。亦類也。出於其類。拔乎其萃。自生民以來。未有盛於孔子也。

返點附本文

有若曰。豈惟民哉。麒麟之於走獸。鳳凰之於飛鳥。泰山之於丘垤。河海於行潦。類也。聖人之於民。亦類也。出於其類。拔乎其萃。自生民以來。未有盛於孔子也。

讀方 有若曰く、豈たゞ民のみならずや。麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける、泰山の丘垤に於ける、河海の行潦に於ける、類なり。聖人の民に於ける、亦類なり。その類より出で、その粹に抜く生民より以來、未だ孔子より盛なるはあらざるなり。

解答 有若がいふのに、たゞ人類ばかりではない、麒麟も他の獸と一類であつてその中から秀でたものである。鳳凰も他の鳥と一類であつてその中から秀でたものである。泰山も丘や嶺の塔などと一類であつてその中から秀でたものである。黄河や大海も、道の水溜と一類であつてその中から秀でたものである。聖人も他の人間と一類であつて、その中から秀でたものである。その人類中から特に秀でたものゝ中、人類あつて以來孔子以上に秀でたものはないのである。

應用 豈偶然也哉

問題

○類……諸侯の旗

○七十……里四方の國

【八】孟子曰。以力假仁者霸。霸必有大國。以德行仁者王。王不待大。湯以七十里。文王以百里。

返點附本文

孟子曰。以力假仁者霸。霸必有大國。以德行仁者王。王不待



大。湯以七十里。文王以百里。

讀方 孟子曰く、力を以て仁を假る者は霸たり。霸は必ず大國を有つ徳を以て仁を行ふ者は王、王は大を待たず。湯は七十里を以てし、文王は百里を以てす。

解答 孟子が力づくで自分の目的を行ふために心の徳を修めるものは諸侯の旗頭である。諸侯の旗頭たるものは、大國の勢力を有してはじめて諸侯の旗頭となり得るのである。正義人道に適つた行を心の徳によつて實行するものは王となる。王となるには大國の勢力による必要はないのである。湯王は七十里四方の國をもつて、文王は百里四方の國をもつて王たる道を行つたのである。

應用 克己復禮爲仁

問題

【九】 人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心。斯有不忍人之政矣。以

○不忍人之心

○同情心

○先王……昔の賢

○不忍人之心

○同情深い政治

○可運之掌上

○思ふ通りにすること

不忍人之心。行不忍人之政。治天下。可運之掌上。

返點附本文

人皆有、不忍人之心。先王有、不忍人之心。斯有、不忍人之政矣。以、不忍人之心。行、不忍人之政。治天下。可運之掌上。

讀方 人皆人に忍びざるの心あり。先王人に忍びざるの心あり、こゝに人に忍びざるの政あり。人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行はゞ、天下を治むること、之を掌上に運すべし。

解答 人間は皆同情心がある。昔の善い天子は同情の心をもつて居た。そのために同情の深い政治をしたのである。同情心をもつて、同情の深い政治を行へば、天下を安々と治めることが出来るのである。

應用 先王之道斯爲美。小大由之。有所不行。



- 天時……攻めるべき時節
- 地利……要害
- 人和……人々が心をあはせること
- 三里之城……小さな城
- 七里之郭……小さな城

問 題

【十】天時不如地利。地利不如人和。三里之城。七里之郭。環而攻之。而不勝。夫環而攻之。必有得天時者矣。然而不勝者。是天時不如地利也。

返點附本文

天時不如地利。地利不如人和。三里之城。七里之郭。環而攻之。而不勝。夫環而攻之。必有得天時者矣。然而不勝者。是天時不如地利也。

讀方 天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず。三里の城、七里の郭、環りて之を攻めて勝たず、それ環りてこれを攻むれば、必ず天時を得るものあり。然り而して勝たざるもの、これ天時地利

に如かざるなり。

解答 攻めるべき時節方角をえらんで、攻めても、それが要害の地であるときは勝つことができない、要害の地を守つても、攻めるものが心を合せて攻めるときは守ることができないのである。小さな城郭の四方をとりかこんで攻めれば、そのどこか一方はよい方角である筈であるのに、勝てぬことのあるのは、方角と時節とかよりも要害の方が大切である筈である。

應用 子曰弗如也

問 題

【十一】且古之君子。過則改之。今之君子。過則順之。古之君子。其過也如日月之食。民皆見之。及其更也。民皆仰之。今之君子。豈徒順之。又從爲之辭。

返點附本文

- 順……そのままにしておく
- 日月之食……日蝕月蝕
- 見之……注意する
- 豈徒順之……



疑問代名詞「豈」を反語として用ひたのである。「そのまゝにしておくだけであらうかおくだけではない」の意は「否」の口實をつくる

且古之君子。過則改之。今之君子。過則順之。古之君子。其過也如日月食。民皆見之。及其二更也。民皆仰之。今之君子。豈徒順之。又從爲之辭。

讀方 且古の君子は、過ては則ち之を改む。今の君子は過てば則ち之に順ふ。古の君子、その過や日月の食の如し。民皆これを見る。その更むるに及んで、民皆之を仰ぐ、今の君子豈徒に之に順ふのみならんや。又從つて之が辭をなす。

解答 その上昔の上に立つて政をする人は、過をして氣がつけばこれを改める。今の上に立つて政を行ふ人は過をしたと氣がついてもそのままにして置く、古の上に立つて政治を行ふ人は、過をしてもそれは太陽や月に、日蝕月蝕のあるやうなもので、一時的のものである。過のある場合には人民が皆注意して之を見るが、一時過であることに氣がついて改めると、人民は益々尊敬するのである。今の上に立つて政をする人は過をしたときに、そのままにして置くばかりでなく、又その過について口實をつくるのである。

應用 日有食之

問題

【十二】古之爲市也。以其所有。易其所無者。有司者治之耳。有賤者。必求龍斷而登之。以左右望而罔市利。入皆以爲賤。故從而征之。征商自此賤丈夫始矣。

返點附本文

古之爲市也。以其所有。易其所無者。有司者治之耳。有賤者。必求龍斷而登之。以左右望而罔市利。人皆以爲賤。故從而征之。征商自此賤丈夫始矣。

讀方 古の市をなすや、その有ある所を以て、その無き所に易ふるもの、有司者之を治むるのみ。賤丈夫あり、必ず龍斷を求めて之に登

○有司……役人  
○龍斷……岡のきりたつて高い所  
○罔……一纏めに  
○征……税をかける



税を掛ける

り、以て左右に望んで、市利を罔す。人皆以て賤しとなす。故に従つて之を征す。商を征するはこの賤丈夫より始る。

解答 昔市を開くのは、自分のもつて居るものと、もつてゐないものとをとりかへるため、役人はその市場の争をとり捌くだけで税をかけることはなかつた。ある賤しい男がゐて、市の開かれるときにはきつと岡のきり立つて高い所を探し、その上に登つて、市場を見渡し、自分の商品の賣れさうな所へ走つて行つて、市場の利益を細で物なとるやうに獨占してしまつた。人々はこの男のやり方を賤しいと思ひ、役人は此男について税をとることにした。商人に税をかけるのはこの賤しい男に税をかけたことから始まるのである。

應用 關讒而不征

問題

○居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

〔十三〕居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

返點附本文

○立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

居、天下之廣居。立、天下之正位。行、天下之大道。得、志與民由之。不得、志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

讀方 天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ひ、志を得れば民と之に由り、志を得ざれば獨その道を行ふ。富貴も淫する能はず、貧賤を移す能はず、威武も屈する能はず、これをこれ大丈夫といふ。

解答 心の徳を修めて寛大に心をもち、外形上の秩序を保ち、人の踏むべき道を踏み、志を得て世にあらはれる時には、民を導いて俱に道に由り、志を得ることができず世にあらはれないときは退いて自分だけでこの仁、禮、義の道を修めてゆく、そして富貴の樂もこの人の心を惑はすことができず、貧賤の苦もこの人の行をかへさすことができず、武力をも



つておどしてもこの人を屈服させることができない。かういふ人こそ、眞に立派な男兒である。

應用 大道廢有仁義。

問題

【十四】 非其道。則一簞之食不可受於人。如其道。則舜受堯之天下。

不以爲泰。子以爲泰乎。

返點附本文

非其道。則一簞食不可受於人。如其道。則舜受堯之天下。不以爲泰。子以爲泰乎。

讀方 その道にあらざれば、則ち一簞の食も人より受くべからず。もしその道ならば、則ち舜堯の天下を受けしかども以て泰となさず。子以て泰となすか。

如

- 非其道……受くべき道でなければ
- 一簞之食……食器一杯の備な食物
- 如……もし
- 舜……高ぶる
- 堯……疑問の言葉
- 子……せんを云ふ

解答 受くべき道でなければ、食器に一杯の飯も受けない、もし受くべき道ならば、舜は堯の天下を譲りうけたが、舜の振舞は決して驕つて居るとはいへない。それとも貴方は舜の振舞が驕つて居ると思はれるか。

應用 一簞食、一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。

問題

【十五】 昔者禹抑洪水而天下平。周公兼夷狄。驅猛獸而百姓寧。孔子

成春秋。而亂臣賊子懼。

返點附本文

昔禹者抑洪水而天下平。周公兼夷狄。驅猛獸而百姓寧。孔子成春秋。而亂臣賊子懼。

讀方 昔者禹洪水を抑めて天下平かなり。周公夷狄を兼ね、猛獸を驅りて百姓寧し。孔子春秋を成して亂臣賊子懼る。

- 春秋……歴史の歴史
- 亂臣……君を執する臣
- 賊子……父を害する子



夏殷

漢文詳解研究の力

解答 昔の禹は洪水を治めて天下が太平になった。周公は野蠻人を合併し、猛獸をおひ拂つて人民が安心するやうになつた。また孔子が春秋を作つて亂臣賊子を攻撃したので、君を弑し、親を害するやうな悪人が懼お怖れるやうになつた。

應用 誠有ニ百姓者一

問 題

【十六】 三代之得天下也以仁。其失天下也以不仁。國之所以興廢存亡者亦然。

返點附本文

三代之得ル天下也ニ以テ仁ヲ。其失フ天下也ニ以テ不仁ヲ。國之所以興廢存亡者亦然。

讀方 三代の天下を得る仁を以てす。その天下を失ふ不仁を以てす。國の興廢存亡する所以の者も亦然り。

○三代……夏殷周

解答 夏殷周が天下を得たときには、その上にたつものが心の徳を修めて天下を得ることが出来た。夏や殷や周が天下を失ふやうになつたのは、その時の上に立つものが心の徳を修めなかつたからである。國家の盛になり、或は衰へることも上に立つものの心の徳の修め方にあるのである。

應用 斯民也。三代之所ニ以テ直道而行一也

問 題

【十七】 愛人不親反其仁。治人不治反其智。禮人不答反其敬。行有不得者。皆反求諸己。其身正而天下歸之。

返點附本文

愛シテ人ヲ不レ親ム反シ其仁ニ。治メ人ヲ不レ治ム反シ其智ニ。禮シ人ヲ不レ答ヘ反シ其敬ニ。行有ニ不レ得ル者一。皆反シ求ム諸己ニ。其身正シテ而天下歸ル之ニ。

讀方 人を愛して親まざればその仁に反れ。人を治めて治まらざれば

○反……反省する



その智に反れ。人を禮して答へざればその敬に反れ。行うて得ざるものあれば皆諸を己に反求す。其身正うして天下之に歸す。

解答 人を愛しても、人が自分に親まなければ、未だ自分の心の徳の修め方が足りないのではないかと反省するがよい。人を治のでも治まらなるときには、自分の事理に明らかなこととの缺けて居はせぬかと反省して見るがよい。人に恭敬の意を表しても、人の方て自分に對して恭敬の意を表しなれば、自分の心を恭しくつゝしみぶかくすることが足りないのではないかと反省して見るがよい。何事でも自分の思ふ通りにならなければ、その原因が自分にあるのではないかと反省して見るがよい、自分の行が正しければ世の中の人々は自分に歸服するのである。

應用 其事上也敬、其養民也惠

問 題

【十八】 桀紂之失天下也、失其民也。失其民者、失其心也。得天下有道。得其民斯得天下矣。得其心有道。得其心斯得民矣。得其心有道。

○所惡勿施爾也  
……嫌なことを  
させないばかり  
である

所欲與之聚之。所惡勿施爾也。

返點附本文

桀紂之失天下也。失其民也。失其民者、失其心也。得天下有道。得其民斯得天下矣。得其心有道。得其心斯得民矣。得其心有道。所欲與之聚之。所惡勿施爾也。

讀方 桀紂の天下を失ふや、その民を失ふなり。その民を失ふとは、その心を失ふなり。天下を得るに道あり。其民を得ればこゝに天下を得。その民を得るに道あり。その心を得ればこゝに民を得。其心を得るに道あり。欲する所は之を與へ之を聚め、惡む所は施すなきのみ。

解答 桀王紂王が天下を失つたのは、人民が離反したためである。人民が離反するとは人民の人心を失つたのである。天下を得るためにはそれを得る筋道がある。その人民が離反せ



ぬやうになれば、天下を得ることができらる。その人民が離反せぬやうにするのは、人民の  
人望を得ればよい。その人望を得るには筋道がある。それは人民の願ふ所のものを與へ或  
はあつめてその願を満足させ、いやがることはいらないやうにしてやればよい。

應用 己所不欲 勿施於人

問 題

【十九】 君子所以異於人者、以其存心也。君子以仁存心。以禮存心。

仁者愛人。有禮者敬人。愛人者人恆愛之。敬人者人恆敬之。

返點附本文

君子所以異於人者、以其存心也。君子以仁存心。以禮存心。  
仁者愛人。有禮者敬人。愛人者人恆愛之。敬人者人恆敬之。

讀方 君子の人に異る所以の者は、その心を存するを以てなり。君子  
は仁を以て心に存し、禮を以て心に存す。仁者は人を愛し、禮ある

○以<sub>レ</sub>其存<sub>レ</sub>心也<sub>二</sub>……  
……心に守る所が  
あるからである  
○恒……永久に

ものは人を敬す。人を愛する者は人恒に之を愛し、人を敬するもの  
は人恒に之を敬す。

解答 成徳の人が常人と異なる所は、その心に守る所があつていつでもそれを忘れないからで  
ある。成徳の人は心の徳を修めて自分の心から離さず恭敬の意を心から離さない。心の徳  
の修まつた人は人を愛する。恭敬の心のあるものは人をうやまふ。人を愛するものは、先  
方の人もいつでも之を愛し、人をうやまふものは、先方の人もいつでもこれをうやまふ。

應用 君子哉違伯玉。

問 題

【二十】 禹稷當平世。三過其門而不入。孔子賢之。顔子當繼世。居於

陋巷。一簞食。一瓢飲。人不滿其愛。顔子不改其樂。孔子賢之。孟

子曰。禹稷顔同道。

返點附本文

○禹稷……禹王  
○陋巷……むさく  
……むさく  
○一簞食……食器  
一杯の僅な食物  
○一瓢飲……瓢一  
杯の僅な飲物



一簞食一瓢飲  
は僅かな粗末な  
飲食物  
○顔子……顔回子  
は男子の尊稱

禹稷當<sub>レ</sub>平世<sub>一</sub>。三<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>其門<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>入<sub>一</sub>。孔子賢<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。顔子當<sub>レ</sub>亂世<sub>一</sub>。居<sub>レ</sub>於陋巷<sub>一</sub>。一<sub>レ</sub>簞食<sub>一</sub>。一<sub>レ</sub>瓢飲<sub>一</sub>。人不<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>其憂<sub>一</sub>。顔子不<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>其樂<sub>一</sub>。孔子賢<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。孟子曰<sub>一</sub>。禹稷顔回同<sub>レ</sub>道<sub>一</sub>。

讀方 禹稷平世に當り、三たびその門を過ぎて入らず。孔子之を賢とす。顔子亂世に當り、陋巷に居り、一簞の食、一瓢の飲、人はその憂に堪へず。顔子は其樂を改めず。孔子之を賢とす。孟子曰く、禹稷顔淵道を同じうす。

解答 禹が洪水を治め、稷は農業を教へ東西走して天下のために力をつくした。殊に禹は洪水を治める際に、三度も自分の家の門前を通つたが、家に入ることがなかつた。孔子は之を賢明な人として居る。顔回は亂れた世に居てむさくるしい巷に住み、僅な粗末な飲食物によつて生活し、他の人ならば耐へきれないのに、顔回は心の徳の勝れた人であつたから貧賤な生活をして、楽しく暮して居た。孔子は顔回をも賢明な人とした自分は、禹も稷も顔回と同じ道を踏んだ賢明な人であると思ふ。

應用 不<sub>レ</sub>逆<sub>レ</sub>詐<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>億<sub>レ</sub>不信<sub>一</sub>。抑亦先覺者<sub>一</sub>、是賢乎<sub>一</sub>。

問 題

【二十一】 伯夷目不視惡色。臣不聽惡聲。非其君不事。非其民不使。治則進。亂則退。橫政之所出。橫民之所止。不忍居也。思與鄉人處。如以朝衣朝冠坐於塗炭也。當紂之時。居北海之濱。以待天下清也。故聞伯夷之風者。頑夫廉。懦夫有立志。

返點附本文

伯夷目不<sub>レ</sub>視<sub>レ</sub>惡色<sub>一</sub>。臣不<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>惡聲<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>其君<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>其民<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>使<sub>一</sub>。治則進<sub>一</sub>。亂則退<sub>一</sub>。橫政之所出<sub>一</sub>。橫民之所止<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>居也<sub>一</sub>。思與鄉人<sub>一</sub>處<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>朝衣朝冠<sub>一</sub>坐<sub>レ</sub>於塗炭也<sub>一</sub>。當<sub>レ</sub>紂之時<sub>一</sub>。居<sub>レ</sub>北海之濱<sub>一</sub>。以待<sub>レ</sub>天下清也<sub>一</sub>。故聞<sub>レ</sub>伯夷之風<sub>一</sub>者。頑夫廉<sub>一</sub>。懦夫有<sub>レ</sub>立志<sub>一</sub>。

○其君……自分の仕ふべき君  
○其民……自分の使ふべき民  
○則……従つて  
○橫政……法度に從はぬ政治  
○橫民……法度に從はぬ人民  
○塗炭……こゝは泥や炭のやうなきたないもの  
○朝衣朝冠……禮服  
○頑夫……鈍い男



○儒夫……意氣地なし

讀方 伯夷は目に悪色を視ず、耳に悪聲を聽かず。その君にあらざれば事へず。その民にあらざれば使はず。治れば則ち進み、亂るれば則ち退く。横政の出づる所。横民の止る所は居るに忍びざるなり。思へらく郷人と處るは、朝衣朝冠を以て塗炭に坐する如きなりと。紂の時に當つて、北海の濱に居り、以て天下の清むを待てり。故に伯夷の風を聞く者、頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり。

解答 伯夷は正しくない聲色は耳目にふれないやうにして。自分の仕ふべき君でなければつかへず、自分の使ふべき民でなければ決して使はなかつた。國が治まつて居るときは出て仕へ、國が亂れるときには退いて隠れて居た。正しい法度に従はない政治の布かれて居る國、法度に従はない人民の居る所にはどうしても住むことが出来ないのである。徳のない人と一緒に居るのは禮服をつけて泥や炭のやうなきたないものの中に坐るやうなものであると思ふて居た。紂王のとき北海の海岸地方に住み、天下の正しくなるのを待つて居た。伯夷の様子を聞けば鈍い男も高潔になり、いくぢなしも志を立てるやうになる。

應用 居<sub>キ</sub>廟堂之高<sub>ニ</sub>。則<sub>レ</sub>憂<sub>フ</sub>其民<sub>一</sub>。

問 題

【二十二】 一郷之善士。斯友<sub>ト</sub>一郷之善士。一國之善士。斯友<sub>ト</sub>一國之善士。天下之善士。斯友<sub>ト</sub>天下之善士。

返點附本文

一郷之善士。斯友<sub>ト</sub>一郷之善士。一國之善士。斯友<sub>ト</sub>一國之善士。天下之善士。斯友<sub>ト</sub>天下之善士。

讀方 一郷の善士は、斯に一郷の善士を友とす。一國の善士は斯に一國の善士を友とす。天下の善士は斯に天下の善士を友とす。

解答 一郷中に於ける最善良な學問あり道理に明らかな人はすなはち又一郷中に於ける最善良な學問あり道理に明らかな人を友として求め、一國中に於て最善良な學問あり道理に明らかな人はすなはち一國中の最善良な學問あり道理に明らかな人を求めて友とし、天下中

○一郷之善士……一郷中に於て最善良な學問あり道理に明らかな人  
○斯……すなはち



で最も善良な學問あり道理に明らかた人はすなはち天下で最も善良な學問あり道理に明らかた人を求めて友とする。

應用 出辭氣、斯遠鄙位矣。

問 題

○可<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>美乎<sup>ト</sup>…  
「乎」を反語としたのである。美しいと云へようか云へないの意。  
○息…成長繁息すること  
○萌蘖…芽ばえやひこばえ  
○從…すぐと  
○是以…以<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>一<sup>ニ</sup>書<sup>キ</sup>そ<sup>レ</sup>う<sup>デ</sup>あるが「是以」と倒

○【二十三】 牛山之木嘗美矣。以其<sup>レ</sup>郊<sup>ニ</sup>於<sup>リ</sup>大國<sup>也</sup>。斧斤伐之。可以爲美乎。是其日夜之所息。雨露之所潤。非無萌蘖之生焉。牛羊從而牧之。是以若彼濯濯也。以爲未嘗有材焉。此豈山之性也哉。

返點附本文

牛山之木嘗美矣。以其<sup>レ</sup>郊<sup>ニ</sup>於<sup>リ</sup>大國<sup>也</sup>。斧斤伐之。可以爲美乎。是其日夜之所息。雨露之所潤。非無萌蘖之生焉。牛羊從而牧之。是以若彼濯濯也。以爲未嘗有材焉。此豈山之性也哉。

裝する方が普通である。  
○濯濯……てらてらと禿げて居る  
○此豈之性也哉…  
「豈」を反語として用ひ終詞「也」を複用して連用したのである。

伐る。以て美となすべけんや。これその日夜の息する所、雨露の潤ほす所、萌蘖の生なきにあらず。牛羊従つて之を牧す。是を以て彼のごとく濯濯たるなり。以て嘗て材あらずとなす。これ豈山の性ならんや。  
【解答】 牛山の木は以前は茂つて美しかった。大國に近くあつたために、大まざかりで人々がその山の木を伐つたので、今では牛山の木は美しいとは云へない。けれども日夜その山の木が成長繁息して雨や露の潤はす所は、芽ばえや、ひこばえが生えんこともない。しかしそれ等の芽ばえや、ひこばえがはえるとすぐ牛や羊を牧畜するので、あのやうに山がてら／＼と禿げて居るのである。そして人々は牛山には昔から材木がなかつたと思つて居るが牛山に材木がないといふのは、牛山の本来の性質ではない。  
應用 敏而好學、不恥下問、是以謂之文也。

問 題

【二十四】 魚我所欲也、熊掌亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚而取熊



○熊掌……熊の掌の肉。  
○義……人の踏むべき道。

掌者也。生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也。

返點附本文

魚ハガガ欲也。熊掌亦我ガガ欲也。二者不可得兼。舍魚而取熊掌者也。生亦我ガガ欲也。義亦我ガガ欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也。

讀方 魚は我が欲する所なり。熊掌も亦我が欲する所なり。二者兼ぬるを得べからざれば、魚を捨て、熊掌を取る者なり。生も亦我が欲する所なり。義も亦我が欲する所なり。二者兼ぬるを得べからざれば、生を捨て、義をとるものなり。

解答 魚肉も自分の好むものである。熊の掌の肉も自分の好むものである。兩方一緒に貰へなければ魚の方は貰はずに、熊の掌の方を貰ふのである。生命も自分の有りたいと思ふものである。人たるもの、踏むべき道も自分は踏みたいと思ふものである。どちらか一つは捨てなければならぬとすれば、自分は生命の方を捨て、人たるもの、踏まねばならぬ道を踏むのである。

廣用 信近於義。言可復也。

問題

【二十五】 一簞食。一豆羹。得之則生。弗得則死。噉爾而與之。行道之人弗受。蹴爾而與之。乞人不屑也。

返點附本文

一簞食。一豆羹。得之則生。弗得則死。噉爾而與之。行道之人弗受。蹴爾而與之。乞人不屑也。

讀方 一簞の食。一豆の羹。之を得れば則ち生き、得ざれば則ち死す。

○弗……打消の言葉「不」より強し。  
○噉爾……いやしめるやうにして  
○蹴爾……足蹴にして。

屑  
人ノノ屑



噉爾として之を與ふれば、道を行くの人を受けず。蹴爾として之を與ふれば、乞人も屑しとせざるなり。

解答 食器に一杯の食物、一碗の汁を貰へば生命をつなぎ、貰はねば死ぬといふ場合にもいやしめるやうにして與へたならばつまり人間でも死んでも貰はない。足蹴にして與へたならば乞食でもそれを受けるのを氣持よく思はない。

應用 彼弗聽。

三十四

問 題

【二十六】 有天爵者。有人爵者。仁義忠信。樂善不倦。此天爵也。公卿大夫。此人爵也。古之人。脩其天爵而人爵從之。今之人。脩其天爵。以要人爵。既得人爵。而棄其天爵。則惑之甚者也。

返點附本文

有天爵者。有人爵者。仁義忠信。樂善不倦。此天爵也。公卿大夫。此人爵也。古之人。脩其天爵而人爵從之。今之人。脩其天爵。以要人爵。既得人爵。而棄其天爵。則惑之甚者也。

○天爵……その人に備つて居る徳の重み。  
○忠信……まじめて言行一致すること。  
○公卿……公は臣下としての第一の位、卿は之に次ぐもの。

○人爵……人の定めた位。  
○要……待ちぶせする……待ちかかへる。

夫。此人爵也。古之人。脩其天爵而人爵從之。今之人。脩其天爵。以要人爵。既得人爵。而棄其天爵。則惑之甚者也。  
讀方 天爵なるものあり。人爵なるものあり。仁義忠信。善を樂んで倦まず。これ天爵なり。公卿大夫。これ人爵なり。古の人。その天爵を脩めて人爵これに従ふ。今の人。その天爵を脩めて、以て人爵を要む。既に人爵を得てその天爵を棄つ、則ち惑へるの甚しきものなり。

解答 世の中には自然とその人に備はる徳の重み、即ち天爵といふものがある。又人の定めた位、即ち人爵といふものがある。心の徳を修め、人たるの道を踏み、眞面目で、言行一致し、好んで善いことをしていやにならないのが天爵である。臣下としての第一の位の公卿大夫、その次の公卿、その次の大夫などの官位は人爵である。古の人はその自然と備はる徳の重みをつけようと修養し、その結果人爵を求めなくても自然と人爵を得られるやうになつた。今の人天爵を修めて、人爵を得やうとして待ち構へて居る。天爵を人爵を得るための道



具にしようとして居るのであるから、人爵さへ得てしまへば天爵などにはふりむきもしないこれは實に考への誤つたことである。

應用 要之於道

問題

【二十七】 大匠誨人必以規矩。學者亦必以規矩。

返點附本文

大匠誨人必以規矩。學者亦必以規矩。

讀方 大匠人に誨ふる必ず規矩を以てす。學者も亦必ず規矩を以てす

解答 大工が、人に大工の道を教へるときには「ぶんまはし」や「さしがね」をつかつて教へる學者も人に教へるときには、大工が「ぶんまはし」や「さしがね」をつかふやうに、仁義の道をもつて教へる。

應用 左丘明恥之、丘亦恥之。

○規矩……「ぶんまはし」と「さしがね」。

規 矩

○賦畝……田畑

○版築之間……築城のために働いて居る所。

○魚鹽之中……魚鹽を賣つて居る人々の中。

○舉於市……市で監獄の役人を擧げて居た所から抜擢せられ。

○將……「まさに何々せんとす」と反讀する。

○拂亂……手違ひにする。

○發達……發達さ

問題

【二十八】 舜發於賦畝之中。傳說舉於版築之間。膠鬲舉於魚鹽之中。管夷吾舉於士。孫叔敖舉於海。百里奚舉於市。故天將降大任於是人也。必先苦其心志。勞其筋骨。餓其體膚。空乏其身。行拂亂其所爲。所以動心忍性。曾益其所不能。

所以動心忍性、曾益其所不能。

返點附本文

舜發於賦畝之中。傳說舉於版築之間。膠鬲舉於魚鹽之中。管夷吾舉於士。孫叔敖舉於海。百里奚舉於市。故天將降大任於是人也。必先苦其心志。勞其筋骨。餓其體膚。空乏其身。行拂亂其所爲。所以動心忍性。曾益其所不能。

讀方 舜は賦畝の中に發し、傳説は版築の間に擧げられ、膠鬲は魚鹽



の中に擧げられ、管夷吾は士に擧げられ、孫叔敖は海に擧げられ、百里奚は市に擧げらる。故に天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ず先づその心志を苦め、その筋骨を勞し、その體を餓し、その身を空乏にし、行その爲す所を拂亂す。心を動かし、性を忍びその能くせざる所を曾益する所以なり。

解答 舜は田舎から徴され、殷人の傳説は人夫として城を築いて働いてる時に拔擢せられ、殷の膠鬲は紂王の虐政を避けて魚鹽を賣つて居たが文王に用ひられ、管仲は監獄の役人から拔擢せられて桓公に用ひられ、孫叔敖は海岸に居たのに楚の莊王に擧げられて楚の總理大臣となり、百里奚は市に隠れて居たのに秦の穆公に拔擢された。それ故天が大切な任務を或人に下さうと思ふときは、その人を逆境に先づおいて、精神を苦め、肉體を苦め、その生活を困難にし、その人のしようとすることを手違ひになるやうにし、思ふ通りにさせない。これはつまり、天がその人の精神を刺戟して、忍びにくいことを耐へるやうにしその力の足りない所を發達させようとするに他ならないのである。

應用 將レ討レ之

問 題

【二十九】 孟子謂宋句踐。曰子好遊乎。吾語子遊。人知之亦囂囂。人

不知亦囂囂。

返點附本文

孟子謂宋句踐。曰子好遊乎。吾語子遊。人知之亦囂囂。人不知亦囂囂。

讀方 孟子宋句踐に謂つて曰く、子遊を好むか。吾子に遊を語らん

人之を知るとも亦囂囂。人知らずとも亦囂囂。

解答 孟子が宋句踐に「貴方は遊説を好まれるか、自分は貴方に遊説の心得を教へよう。それは人が自分の眞價を知つても知らなくても平氣で居ればよいのである。」と云つた。

應用 子當レ勉勵

○遊……遊説……  
ときまはる事……  
○囂囂……平氣で  
居ること



問 題

【三十】 聖人百世之師也。伯夷。柳下惠是也。故聞伯夷之風者。頑夫廉。懦夫有立志。聞柳下惠之風者。薄夫敦。鄙夫寬。奮乎百世之上。百世之下。聞者莫不興起也。非聖人而能若是乎。而況於親炙之者乎。

返點附本文

聖人百世之師也。伯夷。柳下惠是也。故聞伯夷之風者。頑夫廉。懦夫有立志。聞柳下惠之風者。薄夫敦。鄙夫寬。奮乎百世之上。百世之下。聞者莫不興起也。非聖人而能若是乎。而況於親炙之者乎。

讀方 聖人は百世の師なり。伯夷、柳下惠これなり。故に伯夷の風を聞く者、頑夫も廉、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞くもの

○頑夫……鈍い男  
○廉……高潔。  
○薄夫……輕薄な男。  
○敦……手あつくする。  
○興起……發奮する。  
○親炙……直接教育を受ける事。

薄夫も敦、鄙夫も寛、百世の上に奮ひ、百世の下、聞く者興起せざるなきなり。聖人に非ずして能くかくの如くならんや。しかるを況んや之親炙する者に於てをや。

解答 神明不測の聖靈といふものは、末代迄の手本である。伯夷や柳下惠などはこの聖靈である。それ故、伯夷の様子を聞けば、鈍い男でも高潔になり、意氣地なしも、奮つて志を立てるやうになる。柳下惠の様子を聞くものは、輕薄な男も手厚い性質となり、賤しい男も寛大になる。これらの聖靈はずつと以前に立派な行をし、末代の我々がその様子を見て發奮しないものはない、ましてそれ等の聖靈に直接ついで教育を受ければ尙更のことである。  
應用 可レ不レ敬乎。これのよきは、其のありをええ



### 應用問題孟子之部解答

- 【一】孝行と云ふことが出来ようか孝行とは云へない。
- 【二】自分が充分成し得るといふのではない。
- 【三】何人が禮を知らないであらうか知りぬものはな  
し。
- 【四】學問あり、道理に明らかな人は、自分の價値を見  
抜いて待遇して呉れる人の爲に身命をなげうつ。
- 【五】何故汝等は自分達の考へる所を言はぬのであるか
- 【六】先生ほどの國へ行かれても必ずその國の政治を聞  
かれる。
- 【七】どうして思がけなくさうなつたのであらうか、思  
ひがけなくさうなつたのではない。
- 【八】私慾にうち勝つて先王の道に従ふのが人道の根本  
である。
- 【九】古の禮を制定された聖王の道は立派なものである  
併し萬事萬端この禮儀作法づくめでやつて行かう  
と思へばどつ／＼してうまく行かぬ點がある。
- 【十】孔子が「とても及ばないのであ。」と言はれた。
- 【十一】太陽には日蝕のあることがある。
- 【十二】關所を置き、見張をして租税をとりたてること  
をしない。
- 【十三】人の踏むべき道が上世に行はれたが、後世この  
道が廢れたので、仁義といふものが出来た。

- 【十四】儉な食物と儉かな飲物とで辭命をつなぎ、賤し  
い巷に住んで、他の人ならばその哀れな生活を堪  
へられなく思ひであらうが、顔回が心の徳が修つ  
てゐるから心楽しい生活をして居る。
- 【十五】實に人民といふものがある。
- 【十六】實にあの人民といふものがある。
- 【十七】今の世の人民も、夏殷周の世の民と同じやうに  
善くこれを教へ導けば、正しい道を行ふことが出  
来る。
- 【十八】君上に事へる場合には力を竭して忠實にし、人  
民を治める場合には民の幸福をはかることを第一  
とする。
- 【十九】自分の好まぬことは人にもさせてはならぬ。

- 【二十】さても蓬伯玉は徳を具備した人である。
- 【二十一】人が自分を欺くのであるまいか、或は人が自  
分を信用しないのではないかと言ふことを考へて  
人に接するやうなことなく誠心誠意をもつて接す  
べきであるが、一方に於て、先方が自分に對して  
眞情を持つて居るか欺くつもりであるかといふこ  
とを覺り得て、人に欺かれぬやうにするのは賢明  
な人でなくては出来ぬ。このやうな人を眞の賢明  
な人といふべきである。
- 【二十二】朝廷に仕へて居るときは隨つて人民の事を心  
配する。
- 【二十三】言葉は心を發表するものであるからそれで野  
鄙な言葉を使はぬやうにする。



【二十四】その才が敏く、學問を好み、目下の者に質問することを恥ぢぬ美しい徳をもつて居る。それ故文と謙したのである。

【二十五】堅く約束したことが人の踏むべき道からはずれて居なければ、必ず實行すべきである。

【二十六】彼はどうしても聴入れない。

【二十七】之を道へ待伏せして居る。

【二十八】左丘明は之を恥ぢたが丘もまた之を恥ぢるのである。

【二十九】今や之を討たうとする。

【三十】貴方は勉強する筈である。

【三十一】敬はずに居るべきであらうか敬ふべきである。

【二十二】...

【二十三】...

【二十四】...

【二十五】...

【二十六】...

【二十七】...

【二十八】...

【二十九】...

【三十】...

【三十一】...

註釋

○也……句の間に  
あるときは「ヤ」  
と読み、句の末  
にあるときは「  
ナリ」と読み。  
○孝弟……親によ  
く仕へることを  
「孝」といひ、兄  
によく仕へるこ  
とを弟といふ。  
○余……この場  
合には決定した  
文のあとにつけ  
る言葉として用  
ゐたのである。  
○與……「與」と同  
じく疑問の言葉

論語之部

問題

【一】其爲人也孝弟。而好犯上者鮮矣。不好犯上。而好作亂者。未之有也。孝弟也者其爲仁之本與。

返點附本文

其爲<sup>レ</sup>人也孝弟<sup>ニシテ</sup>。而好<sup>ム</sup>犯<sup>ス</sup>上者鮮矣。不<sup>レ</sup>好<sup>ム</sup>犯<sup>ス</sup>上。而好<sup>ム</sup>作<sup>ス</sup>亂者。未<sup>レ</sup>之有<sup>一</sup>也。孝弟也者其爲<sup>レ</sup>仁之本與。

讀方 その人と爲りや孝弟にして上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まざりして亂をなすことを好む者は未だこれあらざるなり。孝弟やそれ仁を爲すの本か。

解答 その人の性質が親に能く孝行を盡し、兄によく事へる性質であつて、目上の人に逆ふ



○仁……心の徳。

○三省……度々反省すること。

○乎……こゝは疑問の言葉。

○忠……眞心を籠めること。

○信……言行一致すること。

ことを好むものは減多にない。目上の人に違ふことを好まぬ人が中の中の規則を破り、平和を亂すやうなことをするものはないのである。この點から見れば、親や兄に能く仕へることは、心の徳を修める根本であらうか。

應用 巧言令色鮮矣仁

問 題

【二】吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。

返點附本文

吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。

讀方 吾日に吾身を三省す。人のために謀つて忠ならざるか。朋友と交つて信ならざるか。習はざるを傳へしかと。

解答 自分は毎日度々自分のしたことを反省する。自分が人から相談を受けたときに眞心を

復す

○信……約束。

○義……消徳上宜しきこと。

○復……實行する。

○禮……禮儀を講義にして敬意を拂ふこと。

○遠……過度な敬意を拂ふこと。

○遠……恥辱……減

盡してその相談にのらないことはなかつたか、朋友と交る場合に言行不一致なことはなかつたか、自分の研究して充分會得せぬことを他人に傳へるやうなことはなかつたかと反省するのである。

應用 夫子之道忠恕而已

問 題

【三】信近於義。言可復也。恭近於禮。遠恥辱也。

返點附本文

信近於義。言可復也。恭近於禮。遠恥辱也。

讀方 信、義に近づけば。言ふべきなり。恭、禮に近づけば恥辱に遠ざかるなり。

解答 人と約束をしたことが、適當なことであれば、自分が約束した前言を實行すべきである。又自分の態度を恭しくして適當な敬意を他人に對して拂ふときは、他人も自分に對し



然に恥辱を受け  
るやうなことが  
なくなる。

○知……價值を見  
わける。

て敬意を拂ふやうになるから恥辱を受けるやうなことはないのである。  
應用 常刻己以恭虔

問 題

【四】不患人之不知。患不知人也。

返點附本文

不患人之不知。患不知人也。

讀方 人の己を知らざるを患へず。人を知らざるを患ふるなり。

解答 他人が自分の眞の價值を知つてくれないことは少しも氣にかけない。それよりは人の眞の價值を自分が見抜けない方を心配する。

應用 知人難矣。

問 題

【五】吾十有五而志於學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六

○吾十有五而志於

學……これから  
十五歳のことを  
「志學」といふ

○三十而立……こ  
れから三十歳の  
ことを「而立」と  
いふ

○四十而不惑……  
これから四十歳  
のことを「不惑」  
といふ

○五十而知天命……  
これから五十歳  
のことを「知  
命」といふ

○六十而耳順……  
これから六十歳  
のことを「耳順」と  
いふ

十而耳順。七十而從心所欲。不踰矩。

返點附本文

吾十有五而志於學。三十而立。四十而不惑。五十知天命。六十而

耳順。七十而從心所欲。不踰矩。

讀方 吾、十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑は

ず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲

する所に從へども矩を踰えず。

解答 自分は十五歳の時大學の道に志して以來勉強して進歩を計り、三十歳の時には清徳の

立場に、しつかりと立つて何物も之を動かすことが出来ぬ程度にまで進歩、四十歳のとき

には道理に通じてどんなことに出會つても惑はぬ程度にまで進み、五十歳のときには天の

自分によつてなましめんとすることの大なることを覺つて之を實行するまでの程度に進み

六十歳のときには、人が道理を語すのを聞くとその道理が自分の耳にさかはず解る程度

に迄進み、七十歳のときには自分の仕やうと思ふ通りにしても法度にはづれることがない



○何以別乎……  
 「なにをもつて」  
 といふ場合、普通の場合「以」  
 と書きさうであるが「何」は  
 賓次の疑問代名詞であるから倒装して「何以」  
 と書く方が普通である。これは特に注意を要する。又「乎」といふ終詞があるの  
 で反語になるのである。  
 ○不敬……敬意  
 を表しなれば

まてに進んだ。  
 應用 順理則裕

問 題

【六】今之孝者。是謂能養。至於犬馬。皆能有養。不敬。何以別乎。

返點附本文

今之孝者。是謂能養。至於犬馬。皆能有養。不敬。何以別乎。

讀方 今の孝は、これよく養ふをいふ。犬馬に至るまで。皆養ふことあり。敬せずんば、何を以てか別たんや。

解答 今世間で孝行といふて居るのは、物質的のもので親に充分に事へることをいふのである。物質的のもので充分養ふのが孝行なら、人は飼つて居る犬や馬に對しても充分に物質的のもので養つて居るのである。親に對する場合には、精神的の敬意を拂はねば犬や馬に對する場合と少して區別することが出来ないのである。

應用 吾何執、執御乎

問 題

【七】殷因於夏禮。所損益可知也。周因殷禮。所損益可知也。其或繼周者。雖百世亦可知也。

返點附本文

殷因於夏禮。所損益可知也。周因殷禮。所損益可知也。其或繼周者。雖百世亦可知也。

讀方 殷は夏の禮による。損益する所知るべきなり。周は殷の禮による。損益する所知るべきなり。それ周に繼ぐ者あらば。百世と雖も知るべきなり。

解答 夏に代つて興つた殷は、すべての禮法のもとを夏の禮法に據つた。そしてその細目だ

○因……據る。  
 ○損益……減したり増したりする。  
 ○或繼周者……或は繼つて周者……周に代つて興つたものがある。



けを或は加へ或は減じたことば昔の記録によつて知ることが出来る。殷に代つて興つた周は、すべての禮法のもとか殷の禮法によつてその細目だけを或は加へ或は減じたことは昔の記録によつて知ることが出来る。かやうに禮法の根本は決して變ることがない所から見ても、周に代つて興るものがあれば、その禮法の根本は周の禮法に據る管である。それ故かくして百代後の禮法と雖もその根本は永久に變るものではないから、今から豫め知ることが出来る。

應用 無レ所ニ損益

問 題

【八】巧言令色足恭。左丘明恥之。丘亦恥之。匿怨而友其人。左丘明恥之。丘亦恥之。

返點附本文

巧言令色足恭。左丘明恥之。丘亦恥之。匿怨而友其人。左丘明

○巧言……人の氣に入るやうに言葉飾る。  
○令色……人の氣に在るやうに心にもなく顔色を繕ふこと。  
○匿怨……怨のあるのをおぼひかくして

○周禮……足は「過」の意である。あまりに謙遜の度過ぎること。

讀方 巧言令色足恭なるは。左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ。怨を匿してその人を友とするは。左丘明之を恥づ。丘も亦これを恥づ。  
解答 言葉を上手に顔色をつくらつて、あまりに謙遜な態度をして人の機嫌をとることはあの左丘明も屑しとしなかつた。自分もかういふことは屑しとしない。怨のある人に對して怨をおぼふて、自分の心に偽つて友達となるといふことは、あの左丘明も屑しとしなかつたことだが、自分も屑しとしないのである。

應用 文不レ可レ匿

問 題

【九】十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。

返點附本文

十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。

○十室之邑……家の十軒位ある小さな村。  
○忠信……まじがて言行一致する。



○金……孔子の

讀方 十室の邑。必ず忠信<sup>ハ</sup>が如き者あらん。丘の學を好む如くならざるなり。

解答 十軒位の人がある小さな村でも、きつと自分位な眞面目な、言行一致した人があるのである。其學問を好む點に於ては自分に敵はぬのである。

應用 千人之諾諾、不如一士之諤諤。

問題

二十六

○仁者……心の徳の修つた人。

○仁之方……心の徳を修しひるむて行く道。

【十】 夫仁者己欲立。而立人。己欲達。而達人。能近取譬。可謂仁之方也。

返點附本文

夫仁者己欲立。而立人。己欲達。而達人。能近取譬。可謂仁之方也。

讀方 それ仁者は己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。よく近取り譬ふるを仁の方といふべきのみと。

解答 一體心の徳の備つた人は自分が何か仕遂げたいと思ふ場合にも人に譲つて、人がそのことを仕遂げるやうにさせ、自分が何事にか到達しようといふ場合にも人に譲つて、人がそれに到達し得るやうにさせる。何事も人の事を手近い自分の身にひきくらべてことをするのが、心の徳をおしひろめて行く道である。

應用 亦無<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>已。

問題

【十一】 不憤不啓。不悱不發。舉一隅。不以三隅反則不復也。

返點附本文

不憤不啓。不悱不發。舉一隅。不以三隅反則不復也。

○啓……導く事。  
○悱……心の中では殆ど解つて居るが口に出して云へぬこと。



て反せざれば則ち復せざるなり。

解答 一人を教育する場合に、その人が勉強してもどうしてもあることが解らず、憤り煩えるまでは、その解らぬことを教へ導くことはしない。十中八九まで解つてあとの一二分が解らず充分に云ひあらはし得ない程度にまで達しなければ、その残の一二分を教へない。四隅あるものゝ一隅を教へて、残の三隅を覺つて之を證明する程の所に達しないものには、又他のことを教へないのである。

應用 亦以足<sub>ヲ</sub>發<sub>ス</sub>

問 題

【十二】 飯疏食。飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。

返點附本文

飯<sub>ハ</sub>疏食<sub>ヲ</sub>。飲<sub>ク</sub>水<sub>ヲ</sub>。曲<sub>リ</sub>肱<sub>ヲ</sub>而枕<sub>ル</sub>之<sub>ヲ</sub>。樂亦在<sub>リ</sub>其中<sub>ニ</sub>矣。

讀方 疏食を飯ひ。水を飲み、肱を曲げて之を枕とす。樂亦その中に

○疏食……粗末な食物。  
○曲<sub>リ</sub>肱<sub>ヲ</sub>……肘枕をして。

あり。

解答 粗末な食物を食ひ、水を飲み、肘枕をして幾らやうな貧しい生活をしても、自分の眞の樂は少しも減じないのである。

應用 祿在<sub>リ</sub>其中<sub>ニ</sub>矣。

問 題

【十三】 曾子有疾。召門弟子。曰啓予足。啓予手。詩云。戰戰兢兢。

如臨深淵。如履薄氷。而今而後。吾知免夫小子。

返點附本文

曾子有<sub>リ</sub>疾<sub>ヲ</sub>。召<sub>シ</sub>門弟子<sub>ヲ</sub>。曰啓<sub>ク</sub>予足<sub>ヲ</sub>。啓<sub>ク</sub>予手<sub>ヲ</sub>。詩云。戰戰兢兢。如<sub>シ</sub>臨<sub>ム</sub>深淵<sub>ニ</sub>。如<sub>シ</sub>履<sub>ム</sub>薄氷<sub>ニ</sub>。而今而後。吾知<sub>ル</sub>免<sub>ル</sub>夫小子<sub>ヲ</sub>。

讀方 曾子疾あり。門弟子を召して曰く、予が手を啓け、予が足を啓

○曾子……子ば男の子の尊稱。曹參のこと。  
○詩云……詩經にこのやうに書いてある。  
○戰々兢兢……懼ぢ恐れて要領すること。  
○而今而後……此二つの「而」の字は助詞て意味。



がな。今後といふことである。小子……弟子

け、詩に云ふ。戰戰兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今而後、吾、免るゝを知るかな小子よと。

解答 曾參が病氣に罹つて死なうとしたときに、弟子を呼び集めて蒲團をあげて自分の手を見よ、又足をも見よ、詩經に懼ち恐れて要領をし深い淵の近くに行つて落ちまいとするやうに、薄氷の上のつて水の中に陥るのを怖れるやうだとあるやうな態度で、父母から傳へられた身體を害することを自分は平常恐れて居たが、今後その心配から免れることができる弟子共よ」といつた。

應用 詩云如切。如磋。如琢。如磨。其斯之謂與

問 題

【十四】 大宰問於子貢。曰夫子聖者與。何其多能也。子貢曰。固天縱之將聖。又多能也。子聞之。曰大宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉不多也。君子多乎哉不多也。

返點附本文

○鄙事……つまりんこと。  
○多……こゝは多能のこと

大宰問<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>子貢。曰夫子聖者與。何其多能也。子貢曰。固天縱之將聖。又多能也。子聞之。曰大宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉不多也。

讀方 大宰、子貢に問ひて曰く。夫子は聖者か。何ぞそれ多能なると子貢曰く、固より天之が將聖を縱せり。又多能なりと。子之を聞きて曰く、大宰我を知れるか、吾少うして賤し。故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや。多ならざるなりと。

解答 ある國の大宰の官をして居た人が、子貢に問ふて「孔子は聖賢であらうか、何の藝能にも達して居られるではないか」と言つた。子貢が「はじめから先生は天に縱されて聖人の域に達して居られる。又貴方の言はれる通り如何にも何事にも達して最もすぐれた居られる」と答へた。孔子はこれを聞いて、「大宰は眞の自分を知つて居られるか、自分は若



復レ己ニ (self-command)

○克レ己ニ……慾を抑へて放縱にならぬやうにすること。  
○復レ己ニ……先哲の定めた道徳上の規則に従ふこと。  
○由レ人乎哉……他人の力によるべきであらうかよるべきではないか。  
○乎レ哉……二つの終詞を重

い時分に貧賤であつた。であるから鄙しい人々とする機能に多く達して居るのである。成徳の人となる要點は多くの機能に達することであらうか決してさうではない。」と云つた。

應用 其爲レ仁本與。

問 題

【十五】 顔淵問仁。子曰。克レ己復レ禮。爲レ仁。一日克レ己復レ禮。天下歸レ仁焉。爲レ仁由レ己。而由レ人乎哉。

返點附本文

顔淵問レ仁。子曰。克レ己復レ禮。爲レ仁。一日克レ己復レ禮。天下歸レ仁焉。爲レ仁由レ己。而由レ人乎哉。

讀方 顔淵仁を問ふ。子曰く。己に克ちて禮に復るを仁となす。一日己に克ちて禮に復れば、天下仁に歸す。仁を爲すは己による。人に

ねて反語としたのである。

○如……萬一。  
○就……親しむ。  
○焉レ殺……疑  
○問代名詞「焉」があるので反語となる。  
○君子……成徳の

よらんや。

解答 顔淵が心の徳を修めしむ道をつれた。孔子が「自分の身を放縱にならぬやうにし、先哲の定めて置かれた道徳上の規則に従ふのが心の徳を修めるといふことである。一旦自分の欲を抑へて道徳上の規則に従へば、その徳の感化によつて、天下中の人々が皆々己の心の徳に従ふやうになる。心の徳を修めることは、自分の考にあることで、他人の力によるべきではない」と云はれた。

應用 得レ爲レ好學之士乎哉。

問 題

【十六】 季康子問政於孔子。曰如殺無道。以就有道。何如。孔子對曰。子爲政。焉用殺。子欲善。而民善也。君子德風也。小人之德草也。草尙之風。必偃。

返點附本文



人として爲政者の二意がある。こゝは爲政者の意。  
 ○小人……道徳は小人といふ意と被治者即ち人民といふ意と二つの意がある。こゝは人民の意。  
 △尚……與へれば……離く。

季康子問政於孔子。曰如殺無道以就有道。何如。孔子對曰。子爲政。焉用殺。子欲善而民善也。君子德風也。小人之德草也。草尚之風。必偃。

讀方 季康子政を孔子に問ひて曰く、もし無道を殺し、以て有道につかば何如と。孔子對へて曰く子、政をなすに、焉ぞ殺を用ひん。子善を欲すれば民善なり。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草これに風を尙ふれば必ず偃す。

解答 季康子が、政治を孔子にたづねて「もし國に善ある無道の人を殺し、有道の善人に親むやうにしたら如何であらう」といふた。孔子は對へて「貴方は政治をなさる場合に、何も死刑などをお用ひになる必要はありませんまい。貴方が上に立つて衆に先んじて善をしようと思はれば、下の人民も善をしようと思ふやうになります。上に立つ者の徳は譬へば風のやうなものであります。治められる人民はあの草のやうなものであります。草の上を風が吹けば必ず草はそれに靡きます。爲政者が善を行へば人民も同じやうに善を行ふやうに感化されますといつた。

應用 焉用殺

問 題

【十七】子曰。邦有道。危言危行。邦無道危行言孫。

返點附本文

子曰。邦有道。危言危行。邦無道危行言孫。

讀方 子曰く、邦道あれば、言を危くし行を危くす。邦道なければ、行を危くして言遜ふ。

解答 邦がよく治つて正しい道が行はれる時には、言ふ所も行ふ所も正しい道を守つて屈せず。邦が治まらず。正しい道が行れない場合には、自分の行はどこまでも正しくして俗に細ひるやうなことをしてはならんが、言ふ所は卑下して、あまり思ふ存分言ふて禍を招くやうな不覺なことをしてはならん。

○有道……よく治つて正しい道が行はれる。  
 △危言……正し  
 △危行……正し  
 △危……正し  
 ○孫……「遜」に同じ。謙遜する事。



應用 是謂レ得レ道。

問 題

【十八】 子言衛靈公之無道也。康子曰。夫如是。奚而不喪。孔子曰。

仲叔圉治賓客。祝駝治宗廟。王孫賈治軍旅。夫如是。奚其喪。

返點附本文

○奚其喪……どうしてほろびようかほろびない。疑問代名詞「奚」を反語として用いたのである。  
○夫……發語である。「一體」の意。  
○治……うけもの。  
○軍旅……軍隊。

子言ニ衛靈公之無道也。康子曰。夫如是。奚而不喪。孔子曰。仲叔圉治ニ賓客。祝駝治ニ宗廟。王孫賈治ニ軍旅。夫如是。奚其喪。讀方 子衛の靈公の無道なるを言ふ。康子曰く。それかくの如くなれば奚ぞ喪びざると。孔子曰く、仲叔圉は賓客を治め、祝駝は宗廟を治め、王孫賈は軍旅を治む。それかくの如し。奚ぞそれ喪びんやと。解答 孔子が衛の靈公の無道なことを語られた。季康子がそれを聞いて「貴方が言はれる通り衛の靈公が無道であるならば、何故喪びないのでせう。」とたづねた。叔圉のやうな辯舌の巧みな人が賓客に接し、外交の方に當り、祝駝のや居る人が宗廟を祭る任に當り、王孫賈のやうな兵事に達して居る人が戦居る。このやうに適材を適所に用ひて居るから、どうして喪びるものか」

應用 復奚疑。

問 題

【十九】 或曰。以德報怨。何如。子曰。何以報德。以直報怨以德報德。

返點附本文

或曰。以德報怨。何如。子曰。何以報德。以直報怨以德報德。

讀方 あるひと曰く、報を以て怨に報せば何如と。子曰く何を以てか

○或……或人といふのと同じである。  
○何如……疑問の言葉である。「如」は「どうしよ」とか「どうしよう」と考へる言葉である。  
○何以……「何」といふ疑問代名詞があるのて普通



「以何」と書きさ  
うな所を「何以  
と倒装したので  
ある、このや  
な場合には倒装  
する方が多いの  
である。

徳に報いん。直を以て怨に報い、徳を以て徳に報いんと。  
解答 或人が「怨ある者に對して恩恵をもつて報いたらどうせう」とたづねた所が、孔子  
が「怨のあるものに恩恵をもつて報いるならば、先方から恩恵を加へられたならば、それ  
に何をもつて報いようとするか。自分は怨ある者に對しては正しい道をもつて報い、恩  
恵を加へられた人に對しては恩恵をもつて返報しようと思ふ」と云はれた。

應用 或謂孔子曰。

問 題

【二十】 衛靈公問陳於孔子。孔子對曰。俎豆之事。則嘗聞之。軍旅  
之事。未之學也。明日遂行。

返點附本文

衛靈公問陳於孔子。孔子對曰。俎豆之事。則嘗聞之。軍旅之事。  
未之學也。明日遂行。

陳……軍陣……  
戰爭のこと  
○俎豆之事……俎  
は祭のとき供用  
をせる机豆は供  
物を盛る器一俎  
豆之事……は祭  
の事。  
○軍旅之事……軍

隊の事。

讀方 衛の靈公陳を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、俎豆の事は則ち嘗  
て之を聞けり。軍旅の事は、未だ之を學ばざるなりと。明日遂に行  
る。

解答 衛の靈公が軍陣のことを孔子にたづねた。孔子がこたへて、禮式のことは以前聞いて  
知つて居りますが、軍隊のことは學んだこともありません」と云つて靈公の問が當を得て  
居ないので、翌日靈公の許を去つてしまつた。

應用 常陳俎豆。設禮容。

問 題

【二十一】 子張問行。子曰。言忠信。行篤敬。雖蠻貊之邦行矣。言不  
忠信。行不篤敬。雖州里行乎哉。

返點附本文

子張問行。子曰。言忠信。行篤敬。雖蠻貊之邦行矣。言不  
忠信。行不篤敬。雖蠻貊之邦行矣。言不忠信。

行……思ふ通り  
に用ひられる。  
○忠信……まじめ  
で言行一致する。  
○篤敬……手厚く  
謹み深くする。







○水火……此は人間に極めて必要なるもの例として、これの他にあるが、この例に争ふもの「互に争ふもの」等の例にひかれることある。

讀方 子貢問ひて曰く一言にして以て終身之を行ふ可き者ありやと。  
子曰く、それ恕か、己の欲せざる所は人に施すこと勿かれと。  
解答 子貢が「一言で言ひ表せて、一生守つて行くべきものがありませうか」たづねた。孔子が「それは恕といふことである。自分がするのがいやなことは、人もいやなことであるからそれを人にさせるようなことをしてはならん」と答へた。

問 題

二十四 子曰。民之於仁也。甚於水火。水火吾見蹈而死者矣。未見蹈仁而死者也。

返點附本文

子曰。民之於仁也。甚於水火。水火吾見蹈而死者矣。未見蹈仁而死者也。

讀方 子曰く。民の仁に於けるや、水火よりも甚し。水火は吾蹈んで死する者を見る。未だ仁を蹈んで死せし者を見ざるなり。

解答 孔子が「民に心の徳が必要なことは日常生活に必要な水や火以上に必要である。水や火は必要なものではあるが害の方面もある即ち水に溺れ、火に焚かれて死んだものは自分も見たことがある。しかし仁には害の方面はなく、仁を行つてそのために死んだものは自分は未だ見たことがない。このやうに民に必要な徳をなぜ人が行はないのであらう。」といはれた。

應用 士之於仁也。甚於水火。

問 題

二十五 孔子曰。益者三友。損者三友。友直。友諒。友多聞。益也。友便辟。友諂柔。友便佞損也。

返點附本文

○直……自分に忠言をして呉れる人。  
○諒……表裏なき人。



○多聞……博く物事を知つて居る人。

○便辟……外見を繕ひ直言しない人。

○善柔……顔色を繕ふて機嫌をとる人。

○便佞……口さきばかりで誠意なきこと。

孔子曰、益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞、益也。友便辟、友善柔、友便佞、損也。

讀方 孔子曰く、益者三友、損者三友あり。直きを友とし、諒を友とし。多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり。

解答 孔子が「友として益のある友に三種あり、友として害める友に三種ある。自分に對して直言してくれる人を友とし、表裏なき人を友とし、博く何事をも知つて居る人を友とするのは益ある方である。外見をつくらつて直言をしてくれない人を友とし、顔色をつくらつて自分の機嫌をとる人を友とし、口さきばかり上手で誠意のない人を友とするのは害ある方である」といはれた。

應用 多聞曰博

問題

○致命……一命を差出す。  
○其可已矣……それが士たる資格がある。  
○士……學問あり道に明らかな人。

【二十六】 子張曰。士見危致命。見得思義。祭思敬。喪思哀。其可已矣。

返點附本文

子張曰。士見危致命。見得思義。祭思敬。喪思哀。其可已矣。

讀方 子張曰く、士は危を見ては命を致し。得るを見ては義を思ひ、祭には敬を思ひ。喪には哀を思ふ。それ可なるのみと。

解答 子張が「士たるものは」君國の危い場合には、自分の一命を捨て、之を救ひ、利益を得られる場合でも、その利益が道に適ふた利益であるかどうかを充分考へ、祭をする場合には充分の敬意を表し、喪にこもつて居るときには充分哀痛の意をあらはすことができれば士としての資格があるのである」と言つた。

應用 事君致其身



問 題

【二十七】寛則得衆。信則民任焉。敏則有功。公則民說。

返點附本文

寛則得衆。信則民任焉。敏則有功。公則民說。

讀方 寛なれば則ち衆を得、信なれば民任ず。敏なれば功あり、公なれば則ち民說ぶ。

寛……心が廣  
○則……從つて  
信……言行一致  
○任……なすまじ  
にす  
敏……着々とす  
ばしくしあけ  
る。○説……悦服す  
る。

解答 寛大であれば、衆くの人の人望を得、言行一致をすれば、民は之を信じてその人のなすまじにし、政治をとる場合に着々と仕あげて行けば、必ず成功する。又公平にすれば人民は悦服するのである。  
應用 寛仁而愛人喜施。

應用問題論語之部解答

- 【一】口さきが上手で人の氣操をとるやうに顔色を繕ふものは心の徳が乏しい。
- 【二】先生の道は真心を盡して思ひやりを深くするのにある。
- 【三】常に自分の心の慾を抑へるために、自分の態度をうや／＼しくし、物事に注意深くする。
- 【四】人を見わけるのは困難なことである。
- 【五】道理にさからはなければ、従つて心がゆつたりとする。
- 【六】自分は何の役をしようか、馬を御する役をしようか。

【七】加へ又は減ずる所がない。

【八】あや模様をおぼふことが出来ぬ。

【九】君命の通りする多數の諛臣は、君の非を諫める一人の直士に敵はない。

【十】これもとても及ばない。

【十一】これもまた啓發する價值がある。

【十二】祿は自然とそこに備つて居るのである。

【十三】詩經に「骨や角や玉や石を細工するとき、之を切り礎き、琢ち又磨き精巧な上にも精巧にする」と書いてあるのはこのやうなことを言つたのでありませうか。



- 【十四】これが心の徳を修める根本であらうか。
- 【十五】學問を好む人物と云へようか言へない。
- 【十六】どうして口利巧を用ゐようか用ゐる必要はない。
- 【十七】これが道徳を身に行ふことが出来ると言ふのである。
- 【十八】またどうして疑はうか疑はない。
- 【十九】ある人が孔子に言ふのに。
- 【二十】いつでも、祭器をならべ、禮儀正しい動作をした。
- 【二十一】眞面目で言行一致することを第一とし、自分より劣つて居るものを次としてはならん。
- 【二十二】恥辱を受けぬやうになる。

- 【二十三】先生の道は眞面目で思ひやりの深いことが根本である。
- 【二十四】士たるものが踏むべき道を守ることの必要なことは水や火が必要なものである以上に必要である。
- 【二十五】多くの物事を附き知つて居るのを「博」といふのである。
- 【二十六】君に奉仕しては、自分の一命を差出す。
- 【二十七】心が大きく情深く、人を可愛がり、人に物をやることを好んだ。

中庸之部

註釋

○君子……盛徳の人  
 ○乎……相應なことをする。  
 ○乎……「を」といふ助詞  
 ○入……どんな位地に入つても  
 ○得……安んずる

問 題

【一】君子<sup>シ</sup>其位<sup>ニ</sup>而行。不願<sup>ス</sup>乎其外。素富貴<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎富貴。素貧賤<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎貧賤。素夷狄<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎夷狄。素患難<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎患難。君子無<sup>ク</sup>人而不自得<sup>マ</sup>焉。

返點附本文

君子<sup>シ</sup>其位<sup>ニ</sup>而行。不願<sup>ス</sup>乎其外。素富貴<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎富貴。素貧賤<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎貧賤。素夷狄<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎夷狄。素患難<sup>ニ</sup>行<sup>フ</sup>乎患難。君子無<sup>ク</sup>人而不自得<sup>マ</sup>焉。

讀方 君子はその位に素して行ひ、その外を願はず。富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては、貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に



行ひ、患難に素しては患難に行ふ。君子は入るとして自得せざるな  
し。

解答 徳の修つた人はその現在居る所の位地に居てすべきことをして他の事を顧はない、富  
貴な地位に居れば富貴相應に、貧賤な地位に居れば貧賤相應に、野蠻な所に居ればその所  
相應に、患難な地位に居ればそれ相應に、正しく處置して行くそれ故君子はどんな地位に  
入つても適當に處置してその所に安んじないといふことはない。

應用 意氣揚揚甚自得也。

問 題

【二】 君子之道。辟如行遠必自邇。辟如登高必自卑。

返點附本文

君子之道。辟如行遠必自邇。辟如登高必自卑。

讀方 君子の道は、たとへば遠きに行く必ずちかきよりするが如く。



「譬へば」  
同じ。  
近い所。  
低い所。

譬へば高きに登る必ず卑きよりするが如し。

解答 盛徳の人となる道は、いはゞ遠方に行くものは必ず近い所から歩き出すやうなもので  
ある又他の例で譬へれば高い所に登るには必ずひくい所から登り出すやうなもので、手近  
い所から修めて行くべきである。

應用 君子之道、謂則防與、防民之所不足者也。

問 題

【三】 子曰。好學近乎知。力行近乎仁。知恥近乎勇。

返點附本文

子曰。好學近乎知。力行近乎仁。知恥近乎勇。

讀方 子曰く。學を好むは知に近く、力め行ふは仁に近く、恥を知る  
は勇に近し。

解答 孔子がいはれるのに、學問を好むものはまだ智者の域に達しなくても、智者の域に近

○乎……こゝでは  
「に」といふ助辭  
につかはれて居  
る。  
○力行……勉強し  
て行ふ。



付いてゐるのである。篤實に力行する人はまだ仁の域に達しなくても仁の域に近づいて居るのである。人に如かぬ恥を知つてはげむものは、未だ勇の域に達しなくても、勇の域に近付いて居ると云へる。

應用 楚子會諸侯乎申。

問題

【四】或生而知之。或學而知之。或困而知之。及其知之一也。或安而行之。或利而行之。或勉強而行之。及其成<sup>レ</sup>一也。

返點附本文

或生而知<sup>レ</sup>之。或學而知<sup>レ</sup>之。或困而知<sup>レ</sup>之。及其知<sup>レ</sup>之一也。或安而行<sup>レ</sup>之。或利而行<sup>レ</sup>之。或勉強而行<sup>レ</sup>之。及其成<sup>レ</sup>功一也。或は生れながらにして之を知り、或は學びて之を知り、或は困

○生<sup>レ</sup>：生れたま  
○利<sup>レ</sup>：食つて  
○成<sup>レ</sup>功<sup>レ</sup>：事業  
の出來上る、

んで之を知る。その之を知るに及びては一なり。或は安んじて之を行ひ、或は利して之を行ひ、或は勉強して之を行ふ。その功をなすに及びては一なり。

解答 ある者は生れつき之を知り、あるものは人<sup>レ</sup>に學んで知り、あるものは刻苦してはじめて之を知らるが、之を知つてからは三人ともに同じである。あるものは樂にしてこれをなし、あるものは食つて之をし、あるものは勉強してこれをする。そのやり方はちがふが、その事業の出來上ることは同じである。

應用 先<sup>レ</sup>財後<sup>レ</sup>禮則民利。



### 中庸之部應用問題解答

【一】非常に得意さうな様子をして満足して居る。  
 【二】盛徳の人の行ふ道はいはゞ「防」といふことであらうか、一般の人々の足りぬ所を補ふのである。  
 【三】楚の殿様が方々の殿様と申といふ所で會合した。

【四】財産といふことを第一に大切なものとし、先王の定められた道徳上の規則を第二のものとすれば人民は貪る心を起す。

### 註釋

○小人……こゝは道徳の修らぬ人  
 ○問居……何事もなく一人で家に居ること  
 ○君子……盛徳の人  
 ○厭然……恥ぢて拵……おほひかくす  
 ○君子……よきことをしたふりする  
 ○肺肝……こゝは本當の心

### 大學之部

#### 問題

【一】小人問居爲不善。無所不至。見君子而后厭然。其不善。而著其善。人之視己。如見其肺肝然。則何益矣。此謂誠於中。形於外。故君子必慎其獨也。

#### 返點附本文

小人問居爲不善。無所不至。見君子而后厭然拵其不善。而其善。人之視己。如見其肺肝然。則何益矣。此謂誠於中。形於外。故君子必慎其獨也。

讀方 小人問居して不善を爲す。至らざる所なし。君子を見てしかる後に厭然としてその不善を拵うて其善を著はす。人の己を視ること



○獨：一人で居るとき。  
○誠：心は善惡兩方に用ひてある。

才

○地：反する。  
○災。

その肺肝を見る如く然れば則ち何の益あらん。これ中に誠なれば外に形はるといふ。故に君子は必ずその獨を慎むなり。

解答 つまらん人間は他で善からぬことをあくまでし、盛徳の人を見て恥ぢてその善からぬことをおほひ秘し、もしもない善いことをもつて外見を飾らうとする。外見を飾つても、もしその人が本當の心明らかになるものであれば益のないことである。これを古語にある通り、心の中にあることは善惡ともに外にあらはれるといふのである。それ故、盛徳の人は自分一人で他人の知らぬ所に居る時にその行を慎むのである。

應用 豚肩不<sub>レ</sub>掇<sub>レ</sub>豆。

問 題

【二】 好人之所惡。惡人之所好。是謂拂人之性。菑必逮夫身。

返點附本文

好<sub>レ</sub>人之所<sub>レ</sub>惡。惡<sub>レ</sub>人之所<sub>レ</sub>好。是謂<sub>レ</sub>拂<sub>レ</sub>人之性。菑必逮<sub>レ</sub>夫身。

讀方 人の惡む所を好み、人の好む所を惡む。是を人の性に拂るといふ。菑必ずその身に逮ふ。

解答 他人のいやがることを自分だけ好み、他人の好むことないやがるのを人の本來の性質に反するといふのである。かういふ人は必ず災をうけるやうになる。

應用 四方以無<sub>レ</sub>拂。

問 題

【三】 仁者以財發身。不仁者以身發財。

返點附本文

仁者以<sub>レ</sub>財發<sub>レ</sub>身。不仁者以<sub>レ</sub>身發<sub>レ</sub>財。

讀方 仁者は財をもつて身を發し、不仁者は身を以て財を發す。

解答 心の徳の修つた君は財をもつときは、つとめて之を人に施すから令名を得て立身し、心の徳の修らぬ君は、身を忘れて財をあつめ、災をうけるやうになる。

應用 爰<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>吠<sub>レ</sub>畝<sub>レ</sub>之中。

○仁者：心の徳の修つた人。  
○發<sub>レ</sub>身：立身する。  
○發<sub>レ</sub>財：財産をあつめる。



### 大學之部應用問題解答

【一】それを盛る祭器にかぶさらぬ程豚の肩肉が小さい  
【二】四方のものが意に逆らふものがない。

【三】舜は田舎から出て立身した。

### 註釋

○士：學問あり  
道理に明らかな  
人。  
○特立：自分の  
信する所を貫く。  
○獨行：世の中  
から獨立して事  
を行ふ。  
○是非：よしあ  
しを批評するこ  
と。  
○義：筋道。

### 唐宋八家文之部

#### 問題

【一】士之特立獨行。適於義而已。不顧人之是非。皆豪傑之士。信道篤。而自知明者也。

返點附本文

士之特立獨行。適於義而已。不顧人之是非。皆豪傑之士。信道篤。而自知明者也。

讀方 士の特立獨行は、義に適ふのみにして、人の是非を顧みず。皆豪傑の士、道を信すること篤くして自ら知ること明らかなる者なり。

解答 學問あり道理に明らかな人が、自分の信する所を貫いて、世の中から獨立して事を行ふ場合には、自分の行ふことが正しい筋道に合ふやうにするばかりで、他人がよしあしを







ぐれた人を聖といふといふ風に説いてある。諸説でないとはいふことが聖人といふのは神明測られざることである。

○徒：…仲間；門人

○晚：…ずつと後に

○疑問の言

也。以爲孔子之徒没。尊聖人者。孟氏而已。晚得揚雄書。益尊信孟氏。因雄書而孟氏益尊。則雄者亦聖人之徒歟。

讀方 始め吾孟軻の書を讀んで、然して後に孔子の道尊くして、聖人の道行ひ易く、王は王たり易く、霸は霸たり易きを知る。以爲らく孔子の徒没して、聖人を尊ぶ者、孟氏のみ。晚に揚雄の書を得て、益々孟氏を尊信す。雄が書に因つて孟氏益々尊し。則ち雄も亦聖人の徒が。

解答 自分は孟子の書を読んで始めて孔子の道が尊く、その道によれば、聖人の道も行ひ易く、王たるものは王としての道を行ひ易く、諸侯の旗頭たるものは諸侯の旗頭としての道を行ひ易いといふことが知つた。自分が考へるのに孔子の門人が死んで後、聖人を尊んだものは孟子だけである。その後ずつとたつてから揚子法言を手に入れて、以前にも増して孟子を尊び信するやうになつた。揚子の本によつて益々孟子の價値があらはれた。この

點から見て揚雄も亦聖人の仲間と云へようか。

應用 甚行易

問 題

【四】世有伯樂。然後有千里馬。千里馬常有。而伯樂不常有。故雖有名馬。祗辱於奴隸之手。駢死於槽枥之間。不以千里稱也。

返點附本文

世有<sub>ニ</sub>伯樂<sub>一</sub>。然後有<sub>ニ</sub>千里馬<sub>一</sub>。千里馬<sub>ハ</sub>常有<sub>ニ</sub>。而伯樂<sub>ハ</sub>不<sub>ニ</sub>常有<sub>一</sub>。故雖有<sub>ニ</sub>名馬<sub>一</sub>。祗辱<sub>ニ</sub>於奴隸之手<sub>一</sub>。駢死<sub>ニ</sub>於槽枥之間<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>以<sub>ニ</sub>千里<sub>一</sub>稱也。

讀方 世に伯樂有つて然る後に千里の馬あり。伯樂常にはあらず。故に名馬ありと雖も、祇に奴隸の手は辱められ、槽枥の間に駢死し、千里を以て稱せられざるなり。

○この文は、當路の人が人を知り、明がなければ、後傑の士があつても空しく逆遇とを馬の話を譬へたので、伯樂を當路の人傑の士に譬へてある。

○不<sub>レ</sub>常有<sub>一</sub>：副詞(常)と打消助動詞(不)と連用したもので、打消したものが上に来たときは



解答 世の中に伯樂のやうなよく馬を見別ける人があつて、はじめて一日に千里も走るよい馬がその價値をあらはすのである。一日に千里も走る名馬はいつでも世の中に居るが、その價値を見別ける伯樂のやうな人はいつでも世の中に居るとは限らない。それ故、一日に千里も走る立派な馬があつても見出されず、奴隸のために苦使せられて、かひば桶のそばにたをれ死に、一日に千里も走る名馬であることを知られずに終るのである。

應用 不<sub>レ</sub>常喜<sub>ハ</sub>。

問 題

【五】或問諫議大夫陽城於愈。可以爲有道士乎哉。學廣而聞多。不求聞於人也。行古人之道。居於晉之鄙。晉之鄙人薰其德。而善良者幾千人。大臣聞而薦之。天子以爲諫議大夫。人皆以爲華。陽子不色喜。居於位五年矣。視其德如在野。彼豈以富貴、移易其心哉。

返點附本文

- 限らないの意に解けばよい。
- 即ち「あること」とも「ないこと」ともあるの意である。
- 之に反して副詞「常」の方が上に來て、「不」は「有」となれば「常」に居ないこととなる。
- これ等のことも問題解くに當つて特に注意を要することである。
- 槽桶の間：餉馬桶のある所。
- 駢死：斃死ぬ。
- 或：或人。
- 有道士：正

- しい道を行ふ人
- 聞多：何事でもよく承知して居る。
- 古人之道：昔の聖人の道。
- 薰：香のものに匂を染めるやうに感化すること。

- 華：榮華。
- 彼豈以富貴ニ移易其心ニ哉
- 疑問代名詞「豈」を反語として用ゐ、終詞「哉」と連用したのである。
- 彼は何しに富貴のために心をかへることがあら

或問諫議大夫陽城於愈。可以爲有道士乎哉。學廣而聞多。不求聞於人也。行古人之道。居於晉之鄙。晉之鄙人薰其德。而善良者幾千人。大臣聞而薦之。天子以爲諫議大夫。人皆以爲華。陽子不色喜。居於位五年矣。視其德如在野。彼豈以富貴、移易其心哉。

讀方 或人諫議大夫陽城を愈に問ふ。以て有道の士と爲すべきか、學廣くして聞多し。聞を人に求めず。古人の道を行ひ、晉の鄙に居る晉の鄙人、その徳に薰じて、善良なるもの幾千人、大臣聞いて之を薦め、天子以て諫議大夫となす。人皆おもへらく華なりと。陽子色喜ばず、位に居ること五年なり。其徳を見るに野あるが如し。彼豈富貴を以てその心を移さんや。



うか心をかへる  
ことではない」の  
意

解答 或人が諫議大夫の陽城について自分にたづねて、「あの人は正しい道を行ふ人といふことが出来ませうか、學問も廣く何事もよく承知して居て、名聞を求めず、昔の聖人の道を行ひ晋の田舎に居るとその土地の人は皆その徳に感化せられて、性質の善良なものが幾千人も出来た。大臣の李泌はこれを聞いて天子に陽城を採用されるやうに推薦した。天子は諫議大夫として採用された。世人は皆これは甚榮達であると思つたが、陽城は別に嬉しいやうな様子もなかつた。陽城が諫議大夫の位に居ること五年であつた。その官に居るときの徳操は、官について居ない時と少しも變りはなかつた。陽城は富貴な身分のために動かされてその天爵を失ふやうなものではない」と云つた。

應用 君子食無<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>飽、居無<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>安、敏<sub>ニ</sub>於<sub>二</sub>事<sub>一</sub>而慎<sub>ニ</sub>於<sub>二</sub>言<sub>一</sub>、就<sub>ニ</sub>有道<sub>一</sub>而正<sub>ニ</sub>焉。可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>學也已

問 題

【六】 巡長七尺餘。鬚髯若神。嘗嵩見讀漢書。謂嵩曰。何爲久讀此。嵩曰未熟也。巡曰。吾書讀不過三遍。終身不忘也。因誦嵩所讀書。盡卷不錯一字。嵩驚以爲巡偶熟此卷。因亂抽他帙以試。無不盡然。嵩又取架上諸書以問巡。巡應口誦無疑。

○終身…一生。  
○他帙…他の帙  
入の書。  
○亂抽…手當り  
次第ひきだす。  
○架上…棚の上

返點附本文

巡長七尺餘。鬚髯若神。嘗見嵩讀漢書。謂嵩曰何爲久讀此。嵩曰未熟也。巡曰。吾於書讀不過三遍。終身不忘也。因誦嵩所讀書。盡卷不錯一字。嵩驚以爲巡偶熟此卷。因亂抽他帙以試。無不盡然。嵩又取架上諸書以問巡。巡應口誦無疑。

讀方 巡は長七尺餘、鬚髯神のごとし。嘗て嵩の漢書讀むを見、嵩に謂つて曰く、何すれど久しく此を讀むやと。嵩曰く未だ熟せざるなりと。巡曰く吾書に於て讀むこと三遍を過ぎず。終身忘れざるなりと。因つて嵩の讀む所の書を誦し、卷を盡して一字を錯らず。嵩驚



いておもへらく、巡偶々此卷に熟するのみと。因つて他帙を亂抽し以て試む。ことごとく然らざるはなし。嵩又架上の諸書を取つて以て巡に問ふ。巡口に應じて誦して、疑ふなし。

解答 張巡は身長七尺あまりで、頗ひげや顎ひげが神の様に神々しくはえて居た。ある時自分が漢書を読んで居るのを見て、自分に「何故そんなに長い間読んで居るのか」とたづねた。自分は「未だよく覚えなないのである」と答へた所が張巡が「自分は本を三度以上讀んだことはない。それで一生忘れなさい」といつた。そこで自分の讀んで居た本を、そらで讀んで一卷聲を立てよみ一字も間違はなかつた。自分は驚いて、張巡は偶然今讀んだ一卷をよく知つて居るのであらうと思つて、他の帙にはいつて居る本を手あたり次第に引き出してためして見た所が、皆前の通りによく覚えて居た。自分は又書棚の上のいろ／＼の本をとつて張巡にたづねた。張巡は自分がたづねると直ぐ聲をたてよ讀み少しも滞ることはなかつた。

應用

未讀了也

問 題

○君子：…盛徳の人  
○法度：…一定の法則  
○有方冊：…書ある中、書いてある。

○先王：…昔の賢王  
○何：…この場合は疑問代名詞を反語として用ゐたのである。

〔七〕孔子云、丘之禱久矣。凡君子行己立身。自有法度。聖賢事業。具在方冊。可效可師。仰不愧天。俯不愧人。内不愧心。積善積惡。殃慶各自以其類至。何有去聖人之道。舍先王之法。而從夷狄之教。以求福利也。

返點附本文

孔子云、丘之禱久矣。凡君子行己立身。自有法度。聖賢事業。具在方冊。可效可師。仰不愧天。俯不愧人。内不愧心。積善積惡。殃慶各自以其類至。何有去聖人之道。舍先王之法。而從夷狄之教。以求福利也。

讀方 孔子云く、丘の禱ること久しと。凡そ君子己を行ひ身を立つる自ら法度あり。聖賢の事業、具に方冊に在り。效ふべく師とすべし



仰いで天に愧ぢず、積善積惡。殃慶各自ら其類を以て至る。何ぞ聖人の道を去り、先王の法を舍て、夷狄の教に従ひ、以て福利を求むること有らんや。

解答 孔子が「自分は平生身を修めて罪を天地に獲ないやうに久しい問心の中に耐つて居る」と言はれた。一體盛徳の人が、何事か行ひ、身を處する場合には自然と一定の法則がある。聖人賢人のしたことは皆書史の中に書いてあるから、その書史を讀めば、聖人賢人に效ふこともでき、聖人賢人を先生とすることができる道理である。かくして言行が道にかなへば天に對しても愧づべきことはない。禍福は自分の言行の善惡によつて平常惡いことをして置けば禍がくるし、平常よいことばかりしておけば福が來るのである。聖人の道をして、先王の法をして、野蠻人の教を率じて、幸福利益を求められるものか。

應用 積善之家有餘慶。積不善之家有餘殃。

問 題

【八】抑愈所謂望孔子門牆。而不入其於宮者。焉足以知是且非邪。雖

○抑……一體。  
○望孔子之門牆

然不可不爲生言之。

返點附本文

抑愈所謂望孔子門牆。而不入其於宮者。焉足以知是且非邪、  
雖然不可不爲生言之。

讀方 抑も愈は所謂孔子の門牆を望んで、その宮に入らざる者なり。焉ぞ以て是且非を知るに足らんや。然りと雖も生のために之を言はずんばあるべからず。

解答 一體自分は孔子の道を學んだと云つても、まだその蘊奥を究めないものである。まだ是非を辨別するだけの資格がないのである。けれども足下に一言しなければならぬものがある。

應用 由也升堂、未入於也。

問 題

志す。孔子の道に

○不入其於宮

きはめない。

○焉足以知是且

非邪：疑問

代名詞焉を反

語として用ひ

終詞邪と連用

して反語とした

のである。

「どうしてよいか

悪いか解らうか

解らない」の意



○方……一定の法則  
○徒……門弟  
○垂諸文……之を本に書き残して

年月日わたる也

【九】 雖然。待用於人者。其肯於器耶。用與舍屬之人。君子則不然。處心有道。行己有方。用則施諸人。舍則傳諸其徒。垂諸文而爲後世法。

返點附本文

雖然。待用於人者。其肯於器耶。用與舍屬之人。君子則不然。處心有道。行己有方。用則施諸人。舍則傳諸其徒。垂諸文而爲後世法。  
讀方 然りと雖も、用を人に待つ者、それ器に似たるか、用と舍とは之を人に屬す。君子は然らず。心をよくに道あり、己を行ふに方あり、用ふるときはこれを人に施す。舍つるときは諸をその徒に傳ふこれを文にたれて後世の法となす。

解答 けれども人に採用されてはじめて自分のはたらきをあらはすものは謂はゞ道具の様なものである。その力を用ひると用ひないのとは人にまかせて居るのである。盛徳の人はさうでない、心を正しい道に置き、一定の法則に従つて行動する。自分の力を用ひる時には人に利を與へ、その人を用ひる地位に居らぬときには、之をその門弟に傳へ、また之を書き残して後世の人々の手本とする。

應用 在記、曰堯有丹朱。

問 題

【十】 唐受天命爲天子。凡四方萬國。不問海內外。無小大。咸臣順於朝。時節貢水土百物。大者特來。小者附集。

返點附本文

唐受天命爲天子。凡四方萬國。不問海內外。無小大。咸臣順於朝。時節貢水土百物。大者特來。小者附集。

○咸……皆。  
○臣順……臣下として従ふ。  
○時節……時折々。  
○水土百物……山海の産物。  
○附集……ついで



○安能空其群耶  
：疑問代名詞「安」か反語として終詞「耶」と連用して反語としたのである。○ど

○受天命  
：天意による。

讀方 唐天命を受けて天子となり、凡て四方萬國、海の内外を問はず小大となくみな朝に臣順し、時節水土の百物を貢す。大なる者は特に來り、小なる者は附集す。

解答 唐が天意を受けて天子となり、東西南北の諸國は皆海内も海外も小國も大國も皆臣下として唐の朝廷に従ひ、時節々々の山海の産物を獻じ、大國は自分々々に貢物をもつて來朝し、小國は自分々々にもちゆくことが出来ないので大國の朝貢するついでに一緒に貢物をもつて來る。

應用 上受天命即位

問 題

【十一】 伯樂一過冀北之野。而馬群遂空。夫冀北馬多天下。伯樂雖善知馬。安能空其羣耶。解之者曰。吾所謂空。非無馬也。無良馬也。伯樂知馬。遇其良輒取之。羣無留良焉。苟無良。雖謂無焉。不爲虛語矣。

語矣

返點附本文

伯樂一過冀北之野。而馬群遂空。夫冀北馬多天下。伯樂雖善知馬。安能空其羣耶。解之者曰。吾所謂空。非無馬也。無良馬也。伯樂知馬。遇其良輒取之。羣無留良焉。苟無良。雖謂無焉。不爲虛語矣。

讀方 伯樂一たび冀北の野を過ぎて馬群遂に空し。夫れ冀北の馬は天下に多しとす。伯樂はよく馬を知ると雖も、安ぞよくその群を空しうせんや。之を解する者曰く吾が所謂空しとは、馬なきにあらざるなり。良馬なきなり。伯樂は馬を知る。其良に遇へば輒ち之を取る。羣良を留むるなし。苟も良なければ馬なしといふと雖も虚語となさ

○安能空其群耶  
：疑問代名詞「安」か反語として終詞「耶」と連用して反語としたのである。○ど

○受天命  
：天意による。



ざるなり。

解答 馬の善惡をよく知つて居る伯樂一度あの北方の冀州の野を通ると馬の群が居なくなる  
と言はれて居る。一體冀州の馬は天下中に澤山に居る。伯樂が馬の善惡をよく見別けると  
いつても冀州の馬を皆とつてしまふといふことはできないのである。之のわけを解釋する  
ものがいふのに、自分が冀州の馬がなくなるといふのではない、其い馬がなくなるといふ  
のである。伯樂は馬の善惡をよく知つて居るから、其い馬が居る度毎にこれをとつてしま  
ふ。それ故馬群中に其い馬がなくなるのである。かりにも其い馬がなければ、馬がないと  
言つても虚言ではないのである。

應用 交<sub>レ</sub>刃<sub>レ</sub>斬<sub>レ</sub>敵

問 題

【十二】 孟軻師子思。子思之學蓋出曾子。自孔子沒。羣弟子莫不有書。獨孟軻氏之傳得其宗。故吾少而樂觀焉。

返點附本文

○宗……本流とす

○曾子……子は男の子の尊稱で曾參のこと。

孟軻師<sub>ト</sub>子思<sub>ヲ</sub>。子思之學蓋出<sub>ル</sub>曾子<sub>ニ</sub>。自<sub>レ</sub>孔子沒<sub>シテ</sub>。羣弟子莫<sub>ク</sub>不<sub>レ</sub>有<sub>ル</sub>書<sub>ヲ</sub>。獨<sub>ニ</sub>孟軻氏之傳<sub>ニ</sub>得其宗<sub>ヲ</sub>。故<sub>ニ</sub>吾少<sub>シテ</sub>而樂<sub>シ</sub>觀<sub>ル</sub>焉<sub>ヲ</sub>。

讀方 孟軻は子思を師とす。子思の學蓋し曾子に出づ。孔子没してより、羣弟子書有らざることなし。獨孟軻氏の傳、その宗を得たり。故に吾少うして觀ることを樂しむ。

解答 孟軻は子思を先生とした。子思の學問は思ふに、曾參から傳へたのである。孔子が死んでから、多くの弟子達は皆書を残して居る。たゞ孟子の傳へたものが孔子の本流を傳へることが出来た。それ故自分は若い時分から、孟子の書を觀ることを好んだ。

應用 蓋<sub>シテ</sub>上<sub>ニ</sub>世嘗有<sub>ラ</sub>不<sub>レ</sub>拜<sub>ル</sub>其親<sub>ニ</sub>者<sub>ヲ</sub>。

問 題

【十三】 夫子之不遇時。苟慕義彊仁者皆愛惜焉。矧燕趙之士。出乎其性者哉。然吾嘗聞。風俗與化移易。吾惡知其今不異於古所云邪。

以 躬

○夫……一體。  
○彊仁……心の

唐宋八家文之部

一〇七

躬 躬



徳を修めようといふ勉める。  
 ③ 矧燕趙之士。田（出）乎其性者哉。：  
 矧、まして。燕趙地方の人々は、性質上さうであるから尙更のことである。  
 ○ 風俗與レ化移易。：風俗といふものは文化が進むにしたがつて變るものである。  
 ○ 吾惡ニ知其今不（不）。：吾、我。惡、嫌。其、その。今、今。不、不。異ニ於古所（不）。：疑問代名詞「惡」を反語として用ゐ、終詞「耶」と連用して反語としたので

返點附本文  
 夫以子之不遇時。苟慕義彊仁者皆愛惜焉。矧燕趙之士。出乎其性者哉。然吾嘗聞。風俗與レ化移易。吾惡知其今不異於古所云

讀方 それおもふに、子の時にあはざるは、苟も義を慕ひ、仁を彊むる者皆愛惜す。矧や燕趙の士、其性に出づる者をや。然れども吾嘗て聞く、風俗化と移り易しと、吾いづくんぞその今の古の云ふ所に異らざるを知らんや。

解答 一體考へて見るのに、貴方が時勢に不遇で、出世されないことは、かりにも正しい道筋を踏むことを好み、心の徳を修めようといふと勉めて居る者は皆貴方のために惜んで居るのである。ましてその燕趙地方の學問あり、道に明らかな人々は、その性質上貴方に深く同情するでありませう。けれども風俗は文化の遷り變りと共に變り易いものであると聞いた

「自分はどうして居た所とちがつてないうかむことがつて居るかも知れない」の意

○ 賞不辭勞。：賞を與へられぬ

卒以オモフニ

ことがあります。自分は貴方が行かれる昔の燕趙地方でも昔と今とはやはり風俗や人の考が變つてやしないかと思ひます。

應用

伏以

佛者夷狄之一法耳。

問 題

【十四】 穎始以俘見。卒見任使。秦之滅諸侯。穎與有功。賞不辭勞。以老見疎。秦真少恩哉。

返點附本文

穎始以レ俘見。卒見ニ任使。秦之滅ニ諸侯。穎與有レ功。賞不レ辭勞。以レ老見レ疎。秦真少恩哉。

讀方 穎始は俘を以て見え、卒には任使せらる。秦の諸侯を滅す、穎與つて功あり。賞、勞に辭いず、老を以て疎せらる。秦まことに恩



少きかな。

解答 穎は始めは俘虜として引き出され、しまひに官に仕じて使はれるやうになつた。秦が諸侯を滅した時にも毛穎の功が興つて大であつた。所が毛穎は功勞に報いる賞を與へられず、老年になつたといふので疎んぜられた。秦はまことに功勞に報いる報い方が薄いといふべきである。

應用 信而疑、忠而被謗。

問題

【十五】 元和十四年春。余以言事得罪。黜爲潮州刺史。其地於漢南海之揭陽。厲毒所聚。懼不得脫死。過廟而禱之。

返點附本文

元和十四年春。余以言事得罪。爲潮州刺史。其地於漢南海之揭陽。厲毒所聚。懼不得脫死。過廟而禱之。

○以言事得罪：政治上のことを出したので。  
○刺史：州知事  
○厲毒：疫病

讀方 元和十四年春。余事をいふを以て罪を得、黜けられて潮州の刺史となる。其地漢の南海の揭陽に於て、厲毒の聚る所、死を脱るゝを得ざるを懼れ、廟を過ぎて之を禱る。

解答 元和十四年の春、自分は佛骨表か献じたので、官から追はれて潮州の知事に貶せられた。この潮州の地は漢の南海郡の揭陽縣の地にあたり、疫病の流行地である。自分は命の危いのを懼れて、廟に参詣して幸運を祈願した。

應用 爲益州刺史

問題

【十六】 凡爲民去害興利。若嗜欲。居三年。於江西八州。無遺便。

返點附本文

凡爲民去害興利。若嗜欲。居三年於江西八州。無遺便。讀方 凡そ民のために害を去り利を興すこと、嗜欲の如し、居ること

○若嗜欲：何か好きなことをするやうであつた。  
○遺便：手を付けずに残されて居る便益。



進士

○進士其父時...  
○嶄然...  
○柳氏有子...  
○柳氏有子...  
○柳氏有子...

三年、江西八州に於て遺便なし。

解答 凡べて人民のために害を除き、利益を興してやることは丁度自分の好きこのむことをするやうであつた。三年間そこに居た間に楊子江以西の八州に遺利がないやうになる程、人民の少しでも利益になることは皆開發してやつた。

應用 地有遺利

問 題

【十七】 子厚少精敏。無不通達。其父時。雖少年已自成人。能取進士第。嶄然見頭角。衆謂柳氏有子矣。

【返點附本文】

子厚少精敏。無不通達。其父時。雖少年已自成人。能取進士第。嶄然見頭角。衆謂柳氏有子矣。子厚少うして精敏。通達せざるなし。其父の時に逮んで、少年

と雖も已に自ら成人。能く進士の第を取り、嶄然として頭角をあらはす。衆謂らく柳氏に子ありと。

解答 子厚は若い時分からものに精しく敏捷であり何でもよく居らぬことはなかつた。その父が生きて居る時に、子供ではあつたがもう自然と大人のやうな風で、見事に進士の試験に及第しきはだつて人よりも抜け出て居た。世間の人々は柳氏はいい子をもつたと云つて居た。

應用 有徳者必有言

問 題

【十八】 嗚呼。士窮乃見節義。今夫平居里巷相慕悅。酒食遊戯相徵逐。

詡詡強笑語。以相取下。握手出肝肺相示。指天日涕泣。誓生死不相背負。真若可信。一旦臨小利害僅如毛髮比。反眼若不相識。落陷穽不一引手救。反擠之。又下石焉者。皆是也。此宜禽獸狄所不忍爲。

○士...  
○窮...  
○逆境...  
○節義...  
○道...



而其人自視以爲得計。聞子厚風。亦可以少愧矣。

返點附本文

- 相徵逐：相往復する。
- 謂々：言葉なやばらげて。
- 相取下：互に謙遜しあふこと。
- 出肝肺：相示：自分の心を出して示しあふ。
- 反眼：顔をそむける。
- 陷穽：おとしまな。
- 風：様子。

嗚呼。士窮乃見節義。今夫平居里巷相慕悅。酒食遊戲相徵逐。詡詡強笑語。以相取下。握手出肝肺相示。指天日。誓生死不相背負。真若可信。一旦臨小利害。僅如毛髮比。反眼若不相識。落陷穽。不一引手救。反擠之。又下石焉者。皆是也。此宜禽獸狄所不忍爲。而其人自視以爲得計。聞子厚風。亦可以少愧矣。

讀方 嗚呼士窮して節義を見はす。今それ平居里巷に相慕悦し、酒食遊戲相徵逐し。詡詡として強ひて笑語し。以て相取り下り、手を握り、肝肺を出して相示し、天日を指して先死相背負せざるを誓ふ。

真に信す可きが如し。一旦小利害の僅に毛髮の比の如きに臨めば、反眼して相識らざるが如く、陷穽に落つとも一たび手を引いて救はず、反つて之を擠し、又石を下す者、皆是なり。此れ宜しく禽獸夷狄もなすに忍びざる所なるべし。而してその人自らみて以て計を得たりとなす。子厚の風を聞かば、亦以て少しく愧ずべし。

解答 實に學問あり道理に明らかな人は、逆境に立つた場合に守るべき所を守るのである。今平生村や町に住んで互に仲よくし、酒食を共にし、共に遊戲し互に往來し。言を釋かにして語り、面白くもないことを無理に笑つて談し合ひ、互に謙遜して相手の氣に入るやうにし、手に手を取り交し、自分の心を互に示しあひ、太陽を指して生きるも死ぬるも互に背くまいと太陽にかけて誓ふ。その有様は真に信用できるやうである、けれども一度僅か毛髮位の利害が相反するときには、互に顔を背けて全く識らぬやうな顔をし、對手がおとしあなに落ちて、一度として手をひっぱつて助けようとはせず、かへつてこれをつきおとし、その人を殺すやうに上から石を投げおとしやうなことをするのは此類の人であること



んなことは禽や獸や野蠻人でもよろしくないことであらう。それにそんなことをする人は自分で適當なことをやつたと思ふて居る。こんな人々は子厚の様子を聞いて少し恥かしく思ふがよい。

應用 四海困窮

問 題

【十九】古之傳者有言。成王以桐葉與小弱弟。戲曰。以封汝。周公入賀。王曰戲也。周公曰。天子不可戲。乃封小弱弟於唐。

返點附本文

古之傳者有言。成王以桐葉與小弱弟。戲曰。以封汝。周公入賀。王曰戲也。周公曰。天子不可戲。乃封小弱弟於唐。

讀方 古の傳ふる者言へるあり。成王桐葉を以て小弱弟に與へ、戯れて曰く、以て汝を封ぜん。周公入つて賀す。王曰く、戯れしなり

○小弱弟…：幼い弟。  
○封…：領地を與へる。

と。周公曰く、天子は戯るべからずと。乃ち小弱弟を唐に封ず。

解答 昔からかういふことを云ひ傳へて居るものがある。成王が桐の葉を幼少な弟にやつて戯れて「これをお前を封じるしとしよう」といふた。それを聞いて周公が成王の朝廷に行つて弟を封ぜられた祝を言上した所が成王は、「あれは戯れに言つたことである」と云はれたのに、周公が「天子には戯言がない筈でございます」といふたので、成王はしかたなしに、幼少な弟を唐に封じた。

應用 老母弱弟委之將軍

問 題

【二十】灌水之陽有溪焉。東流入於瀟水。或曰冉氏嘗居也。故姓是溪曰冉溪。或曰可以染也。名之以其能。故謂之染溪。

返點附本文

灌水之陽有溪焉。東流入於瀟水。或曰冉氏嘗居也。故姓是溪曰冉溪。或曰可以染也。名之以其能。故謂之染溪。

○陽…：水のときには「北」の意となり、山のときは南の意となる。全く反對であるから注意を要する。



讀方 瀧水の陽溪あり。東流して瀧水に入る。或は曰く冉氏嘗て居るなり。故に是の溪に姓して冉溪と曰ふと。或は曰く以て染むべし。之に名づくるに其能を以てす。故に之を染溪と謂ふと。

解答 瀧水の北に溪がある。東の方に流れて瀧水といふ川に入る。或は冉氏がこゝに居たので、この溪を冉溪と名付けたといふものがある。又あるものはその水で染めることのできるから、この溪の功能の方から名付けて染溪ともいふ。

應用 溪在瀧陽。

問題

〔二十一〕 予樂而如其言。則崇其臺。延其檻。行其泉於高者。墜之潭。有聲淅然。尤與中秋觀月爲宜。

返點附本文

予樂而如其言。則崇其臺。延其檻。行其泉於高者。墜之潭。有聲淅然。尤與中秋觀月爲宜。

○樂其言... 請をして見晴しの所を廣くする  
○然... ざあざあといふ。  
○中秋... 舊八月

553  
あ

十五夜。

聲淅然。尤與中秋觀月爲宜。

讀方 予樂んで其言の如くす。則ち其臺を崇らし、其檻を延き、其泉を高さ者に行りて、之を潭に墜す。聲あり淅然。尤も中秋月を観るがために宜しとなす。

解答 自分は喜んでその人の言つたやうにした。そこで土をもつた見晴しの場所を高くし、欄干をつくり、泉を高い所から潭の中におちるやうにしたのでざあざあといふ音がするやうになり、八月十五夜の月を観るために最よい所である。

應用

中秋觀月。

問題

〔二十二〕 能者進而由之。使無所德。不能者退而休之。亦莫敢愠。不銜能。不矜名。不親小勞。不侵衆官。日與天下之英才。討論其大經。

返點附本文

○能者... 才帥ある人。  
○休之... 官職を解く。



- 愠……心中に  
かゝる。
- 街……見せびら  
かす。
- 矜……自慢する
- 小勞……つまら  
ん仕事。
- 衆官……役人達  
の仕事。
- 英才……すぐれ  
た人。
- 大經……大切の  
道。

能者進而由之使無所德不能者退而休之亦莫敢愠不街  
能矜不矜名不親小勞不侵衆官日與天下之英才討論  
其大經

讀方 能者は進めて之を由ふれども、徳とする所なからしむ。不能者  
は退けて之を休むれども亦取て愠るなし。能を街はず、名に矜らず  
小勞を親らせず。衆官を侵さず、日に天下の英才と、その大經を討  
論す。

解答 能力のあるものを抜擢して採用しても、採用されたものが別に恩に感じないやうにし  
能力のないものをその官職から退けても、決してその人が心中に怒を含むやうなことはな  
い。又能力を見せびらかすこともせず、虚名を誇るやうなこともなく、つまらん仕事まで  
自分親らするやうなことなく、役人達の仕事の領分を侵すやうなこともせず、毎日世のす  
ぐれた人々と大切な道について議論し研究する。

應用 官因老病休

問題

〔二十三〕 柳先生曰。清居市不爲市之道。然而居朝廷。居官府。居庠  
塾鄉黨。以士大夫自名者。反爭爲之不已。悲哉。然則清非獨異於市  
人也。

返點附本文

柳先生曰。清居市不爲市之道。然而居朝廷。居官府。居庠塾  
鄉黨。以士大夫自名者。反爭爲之不已。悲夫。然則清非獨異  
於市人也。

讀方 柳先生曰。清市に居て市の道をなさず。然り而して朝廷に居り  
官府に居り、庠塾郷黨に居り、士大夫を以て自ら名づくる者、反の

- 清……市に居る  
のために交際す  
ること。
- 自名……自稱す  
る。
- 官府……役所。



て争つて之を爲して已まず。悲しいかな。然らば則ち清はひとり市人に異なるのみにあらざるなり。

解答 自分が思ふに、宗清は町人であり乍ら、利益を以て人と交るやうなことはしない。それに朝廷に仕へ、役所に居り、學校や、地方に居つて、立派な人物であると自稱するものが、かへつて利益をもつて人と交るやうなことをして居る。誠にこれは悲しむべきことである。

應用 天下以ニ市道ニ交。

問題

【二十四】孔子何爲而修春秋。正名以定分。求情責實。別是非。明善德。此春秋之所以作也。

返點附本文

孔子何爲而修春秋。正名以定分。求情責實。別是非。明善

○正名以定分：君臣父子の名義を正してその分限を定めた。  
○求情責實：情實を明らかにする。

○是非：正しき事と正しくないこと。

徳。此春秋之所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>也。

讀方 孔子何のためにして春秋を修むる。名を正しく以て分を定め、情を求めて實を責め、是非を別ち、善徳を明らかにす。これ春秋の作る所以なり。

解答 孔子は何のために春秋を作つたのであらうか、それは、君臣父子の名義分限を正しくし、情實を明らかにし、是非を區別し、褒貶をするためである。

應用 覺<sub>レ</sub>今是而昨非。

問題

【二十五】臣聞朋黨之說自古有之。惟<sub>レ</sub>入君辨其君子小人而已。大凡

君子與君子。以同道爲朋。小人與小人以同利爲朋。此自然之理也。

返點附本文

臣聞朋黨之說自古有之。惟幸人君辨其君子小人而已。大凡君子

○朋黨：徒黨を組むこと。  
○幸：こひねがふ。



與<sub>レ</sub>君子<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>同道爲<sub>レ</sub>朋。小人與<sub>レ</sub>小人<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>同利爲<sub>レ</sub>朋。此自然之理也。

讀方 臣聞く朋黨の説は古よりこれあり。惟だ人君その君子小人を辨ずることを幸ふのみ。大凡そ君子は君子と道を同じくするを以て朋をなし、小人は小人と利を同じくするを以て朋をなす。これ自然の理なり。

解答 私に徒黨を組むことについての説は昔からあるのを聞いて居ります。私は只人君たるものが臣下の中に徒黨を組むものがあつた場合には、その徒黨がつまりら連中の徒黨であるか、立派な人物の徒黨であるかを區別して下されば、それで結構であると思ひます。一體立派な人物は互に踏むべき道を同じくするから立派な人物同志で仲間をつくり、つまりら連中は、互に利益を同じくするからつまりら人同志で仲間をつくるのである。これは自然にさうなるべき道理であります。

應用 空幸<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>

問 題

○刑戮…刑罰  
○刑入<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>死者  
○死<sub>レ</sub>刑にあたるもの

【二十六】 信義行於君子。而刑戮施於小人。刑入於死者。乃罪大惡極。此又小人之尤甚者也。

返點附本文

信義行<sub>レ</sub>於君子<sub>一</sub>。而刑戮施<sub>レ</sub>於小人<sub>一</sub>。刑入<sub>レ</sub>於死者<sub>一</sub>。乃罪大惡極。此小人之尤甚者也。

讀方 信義は君子に行はれ、刑戮は小人に施す。刑死に入る者、乃ち罪大に惡極る。これ又小人の尤も甚しき者なり。

解答 言行一致して正しい道を踏み行ふことは、盛徳の人にのみ行はれ、つまりら人は罪惡ばかりするから、天下の刑罰はつまりら人間にばかり加へられる。その刑罰の中で死刑にあたるものは、その罪最甚しく、極惡のものである。之はまたつまりら人間の中でも、もつともつまりら人間である。







○太子太傅：太子のおもひ役。  
 ○遺稿：死んだ人の原稿。  
 ○集録：あつめ書きつける。

問 題

【二十八】 予友蘇子美之亡後四年。始得其平生文遺稿。於太子太傅杜公之家。而集録之以爲十卷。

返點附本文

予友蘇子美之亡後四年。始得其平生文遺稿。於太子太傅杜公之家。而集録之以爲十卷。

讀方 予が友蘇子美の亡せて後四年、始めてその平生の文章遺稿を太子太傅杜公の家にて得て、之を集録して以て十卷となす。

解答 自分の友人の蘇子美が死んでから四年目に、始めて、蘇子美が平生書いておいた文章や、下書きを太子太傅の杜公の家で手に入れて、之を一纏めに集め書いて十卷とした。應用 其人亡則其政息。

問 題

【二十九】 予少以進士遊京師。因得盡交當世之賢豪。然猶以謂國家臣一四海。休兵革。養息天下。以無事者四十年。而智謀雄偉非常之士無所用其能者。往往伏而不出。山林屠販。必有老死而莫見者。欲從而求之。不可得。

返點附本文

予少以進士遊京師。因得盡交當世之賢豪。然猶以謂國家臣一四海。休兵革。養息天下。以無事者四十年。而智謀雄偉非常之士無所用其能者。往往伏而不出。山林屠販。必有老死而莫見者。欲從而求之。不可得。

讀方 予少うして進士を以て京師に遊ぶ。因つて盡く當世の賢豪に交

○以進士：進士の試験を受ける資格をもつてして一統し。  
 ○兵革：戦争。  
 ○非常之士：なみくならぬ人  
 ○屠販：賤しい肉屋のやうなことをやつて



るを得たり。然れども猶以謂らく、國家四海を臣一にし、兵革を休め、天下を養息し、以て無事なる者四十年、而して智謀雄偉非常の士、その能を用ふる所なき者、往々伏して出でず、山林屠販、必で老死して見るゝなき者あらん。従つて之を求めんと欲すとも得べからず。

解答 自分は若いときに進士の試験を受ける資格をもつて都に遊學した、それで現今の賢傑豪傑に交際することが出来た。けれどやはり思ふに、我が國が人民を皆臣下とし、天下を一統し、戦争をやめ、天下の人民がその業に安んじるやうにし、太平に治つてることが四十年もつゞいて居る、それ故知謀の深い、すぐれた立派な人物で、その能を用ふる所のないものが、まゝ隠れてあらはれず、山林に隠れ又は屠販夫のやうな賤しいことをして空しく老年になり死んで世の中の人々に知られずにしまふものが必ずあらう。これらのものを探さうと思つても探すことはできない。

應用 樊噲屠販之豎

問 題

【三十】 今豫介於江淮之間。舟車商賈。四方賓客之所不至。民不見外事。而安於畝衣食。以樂生送死。而孰知上之功德。休養生息。涵煦百年之深也。

返點附本文

今豫介<sub>マレ</sub>於江淮之間。舟車商賈。四方賓客之所不<sub>レ</sub>至。民生不<sub>レ</sub>見外事。而安<sub>ニ</sub>於畝衣食。以樂<sub>ニ</sub>生送<sub>レ</sub>死。而孰知<sub>ニ</sub>上之功德。休養生息。涵煦百年之深也。

讀方 今豫は江淮の間に介され、舟車商賈、四方賓客の至らざる所、民生れて外事を見ず、畝衣食に安じ、以て生を樂み、死を送る。而して孰れか上の功德、休養生息、涵煦百年の深さを知らんや。

○畝：田の用水の流れる溝。畝一うね。兩方で田畑。○孰：この疑問代名詞が反語となつて居るのである。○涵煦：涵は水でひたすこと。煦は日でおたしめること。涵煦に浴すること。



解答 扱て滁州は揚子江と淮水との間にあつて、舟車の便もなく、ものを賣りにくる商人も方々から来る人々もない、その人民は自分の土地以外のことには知らず、田畑の中に住んで自分達の衣食に満足し、楽しく生活し、老年に達すれば次第に死んでゆくのである。そしてあまり太平に治まつて居るので、天子のお恵で自分達はその業に安んじ、永い間天子の恩澤に浴して居ることをだれも知つて居るものはない。

應用 介子大國

問題

- 期：目あてをつける。
- 竊：心の中で
- 料：推量する
- 奇：思ひがけない。

【三十一】 公之攻德勝也。初受命於帝前。期以三日破敵。梁之將相聞者皆竊笑。及破南城。果三日。是時莊宗在魏。聞公復用。料公必速攻。自魏馳馬來救。已不及矣。莊宗之善料。公之善出奇。何其神哉。

返點附本文

公之攻<sub>ム</sub>德勝<sub>ニ</sub>也。初<sub>ケ</sub>受<sub>テ</sub>命<sub>ヲ</sub>於<sub>テ</sub>帝前<sub>ニ</sub>。期<sub>ス</sub>以<sub>テ</sub>三日<sub>ニ</sub>破<sub>ク</sub>敵<sub>ヲ</sub>。梁<sub>ノ</sub>將相<sub>ハ</sub>聞<sub>ク</sub>者<sub>ハ</sub>皆<sub>シ</sub>竊<sub>ニ</sub>笑<sub>フ</sub>。及<sub>テ</sub>破<sub>ル</sub>南城<sub>ヲ</sub>。果<sub>シ</sub>三日<sub>ナリ</sub>。是<sub>レ</sub>時<sub>ニ</sub>莊宗<sub>ハ</sub>在<sub>リ</sub>魏<sub>ニ</sub>。聞<sub>ク</sub>公<sub>ハ</sub>復<sub>テ</sub>用<sub>ニ</sub>。料<sub>ス</sub>公<sub>ハ</sub>必<sub>ズ</sub>速<sub>ニ</sub>攻<sub>ム</sub>。自<sub>レ</sub>魏<sub>ニ</sub>馳<sub>テ</sub>馬<sub>ヲ</sub>來<sub>テ</sub>救<sub>フ</sub>。已<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>ス</sub>矣。莊宗<sub>ノ</sub>善<sub>ク</sub>料<sub>ル</sub>。公<sub>ノ</sub>善<sub>ク</sub>出<sub>テ</sub>奇<sub>ヲ</sub>。何<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>神<sub>ニ</sub>哉。

讀方 公の德勝を攻むるや、初め命を帝前に受け、三日を以て敵を破らんことを期す。梁の將相、聞くもの皆ひそかに笑ふ。南城を破るに及んで果して三日なり。この時莊宗魏に在り、公復た用ひらると聞き、公の必ず速に攻めんことを料り、魏より馬を馳せて來り救ふ。已に及ばず、莊宗の善く料る。公の善く奇に出づる、何ぞそれ神なるや。

解答 公が德勝を攻めた時、最初命令を天子の前で受け三日の中に敵をうち敗らうと、めあてをつけた。梁の國の大將や大臣の聞いて居るものは皆心の中で笑つて居た。所が南城の



敵をうち敗つたときは、前言通り三日であつた。このとき敵の晋の莊宗は魏に居たが、公が又梁の大將として採用されたことを聞いて、公が必ずすぐと攻めて来るだらうと考へ、魏から馬にのり急いで南城の味方を救ひに来た。所がもう戰爭がすんでしまつて間にはなかつた。晋の莊宗が公の心中を察したことも、公が普通以上の計を用ひたこともどちらも、實に常人の想像の及ばん所ではないか。

應用 竊負而遁

問題

【三十二】予少<sup>ウシテス</sup>漢東。漢東僻陋<sup>ヒシクシラシク</sup>無<sup>シ</sup>學者。吾家又貧<sup>ニシテ</sup>無<sup>シ</sup>藏書。州南有大姓李氏者。其子堯輔頗好<sup>ク</sup>學。予爲<sup>ニ</sup>兒童時。多遊<sup>ブ</sup>其家。見<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>敝篋<sup>ヲ</sup>。貯<sup>ル</sup>故書<sup>ヲ</sup>在<sup>ニ</sup>壁間。發<sup>シテ</sup>而視<sup>ス</sup>之。得<sup>ル</sup>唐昌黎先生文集六卷。脫落顛倒無<sup>シ</sup>次序。因乞<sup>フ</sup>李氏<sup>ニ</sup>以歸。讀<sup>シ</sup>之。見<sup>ル</sup>其言深厚而雄博。

返點附本文

- 大姓……大家……豪家
- 僻陋……邊鄙
- 敝篋……やぶれ
- 深厚……意味深
- 雄博……雄健宏

博。

予少<sup>ウシテス</sup>家<sup>ニ</sup>漢東。漢東僻陋<sup>ニシテ</sup>無<sup>シ</sup>學者。吾家又貧<sup>ニシテ</sup>無<sup>シ</sup>藏書。州南有大姓李氏者。其子堯輔頗好<sup>ク</sup>學。予爲<sup>ニ</sup>兒童時。多遊<sup>ブ</sup>其家。見<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>敝篋<sup>ヲ</sup>。貯<sup>ル</sup>故書<sup>ヲ</sup>在<sup>ニ</sup>壁間。發<sup>シテ</sup>而視<sup>ス</sup>之。得<sup>ル</sup>唐昌黎先生文集六卷。脫落顛倒無<sup>シ</sup>次序。因乞<sup>フ</sup>李氏<sup>ニ</sup>以歸。讀<sup>シ</sup>之。見<sup>ル</sup>其言深厚而雄博。

讀方 予少<sup>ウシテス</sup>うして漢東に家す。漢東は僻陋にして學者なし。吾家又貧にして藏書なし、州南に大姓李氏といふ者あり。其子堯輔頗る學を好む。予兒童たりし時、多く其家に遊ぶ。その敝篋を見るに、故書を貯へて壁間<sup>ニ</sup>あり、發きて之を視る。唐の昌黎先生の文集六卷を得たり。説落顛倒<sup>ニ</sup>次序なし。因つて李氏に乞ひて以て歸る。之を讀みてその言の深厚にして雄博なるを見る。

解答 自分は若い時分に漢東に住んで居た漢東は邊鄙な所で學者がない、自分の家も貧乏で



貯へた本もない、州の南に李氏といふ豪家があり、その息子の堯輔が非常に學問好きであつた。自分は子供のときに度々その家に遊びに行つたが、そのやぶれた古い箱の中に古い本を貯へて壁の所にあつた。その箱をひらいて見ると、唐の昌黎先生の文集が六卷あつた。その本は古くなつて綴目もきれ前後も亂れ、順序が解らなくなつて居る。そこで李氏に願つてそれを自分の家にもつて歸つた。之の文集を讀んで、その文章が意味深く雄健であり、宏博であると思つた。

應用 猶棄敝籟而獲珠玉

問 題

【三十三】先生貌厚而氣完。學篤而志大。雖在吠畝。不忘天下之憂。

返點附本文

先生貌厚而氣完。學篤而志大。雖在吠畝。不忘天下之憂。

讀方 先生貌厚うして氣完く、學篤うして志大なり。吠畝に在りと雖も、天下の憂を忘れず。

○氣完：氣力があつた。  
○吠畝：こゝは田舎。  
○天下之憂：天下の人々全體のための心配

解答 先生は容貌が温厚で、氣力あり、學問を好み、志が大である。田舎に居ても、天下の人々のために心配しなければならんことは決して忘れなかつた。

應用 先天下之憂一而憂

問 題

【三十四】夫養不必豐。要於孝。利雖不得博於物。要其心之厚於仁。

吾不能教汝。此汝父之志也。修泣而志之不敢忘。

返點附本文

夫養不必豐。要於孝。利雖不得博於物。要其心之厚於仁。吾不能教汝。此汝父之志也。修泣而志之不敢忘。

讀方 それ養つて必ずしも豊ならずとも、孝に要せよ、利は物に博さ

を得ずと雖も、其心の仁に厚きを要せよ。吾汝に教ふること能はず

○不<sub>シ</sub>必<sub>ナ</sub>豊<sub>ト</sub>：打消助動詞「不」と副詞「必」と連用した場合に「不」が「必」の上に来るときは「豊でないこと」もあり得る。「豊」とは「限らぬ」の意である。「必」が上にあると「きつと豊でない」と意となる

○要：第一とせ



○志<sup>シ</sup>：記憶して  
 ○不<sup>レ</sup>敢<sup>テ</sup>忘<sup>ル</sup>：打  
 消の助動詞「不」  
 と副詞「敢」を  
 連用したので、  
 打消の助動詞  
 「不」がこのやう  
 消と上に来ると打  
 の方が上に来る  
 と「敢不<sup>レ</sup>忘<sup>ル</sup>」と  
 反語になる。こ  
 れ等も特に注意  
 を要する。

これ汝の父の志なりと、修泣いて之を志し、敢て忘れず。

解答 一體親を養ふ場合には物質的のものを豊富にするとは限らなくとも、精神的の修行は第一とせよ、利益をひろく人々に與へることが出来なくとも、自分の心の徳を一心に修めることを第一とせよ。自分は、お前に教へることは出来ないが、これがお前の父上の志であると語られた。自分は涙を流してこれを心に刻みつけ、決して忘れないでゐる。

應用 博聞強志之人也

問題

【三十五】 嗚呼、作器者。無良材而有良匠。治國者。無能臣而有能君。蓋材待匠而成。臣待君用。

返點附本文

嗚呼。作<sup>レ</sup>器者。無<sup>ニ</sup>良材<sup>一</sup>而有<sup>ニ</sup>良匠<sup>一</sup>。治<sup>レ</sup>國者。無<sup>ニ</sup>能臣<sup>一</sup>而有<sup>ニ</sup>能君<sup>一</sup>。蓋材待<sup>レ</sup>匠而成。臣待<sup>レ</sup>君用。

一方 嗚呼、器を作る者、良材なくして良匠あり。國を治むる者、能臣なくして能君あり、蓋材は匠を待つて成り、臣は君を待つて用ひらる。

解答 實に器物を造るには良い材料が一番必要なものではなく、良い細工人が一番必要である。國を治めるには、能力ある臣が一番必要なのではなく、能力ある君が一番必要である。材料は、細工人の手によつてはじめて器物となり、臣は君があつてはじめて採用せられるのである。

應用 尊<sup>レ</sup>賢使<sup>レ</sup>能

問題

【三十六】 嗚呼五代之亂極矣。傳所謂天地閉。賢人隱之時與。當此時。

臣弑其君、子弑其父。而搢紳之士。安其祿而立其朝。充然無復廉恥色者。皆是也。吾以謂自古忠臣義士。多出於亂世。而怪當時可道者。

○搢紳之士：身  
 分のよい人。  
 ○充然：平氣て  
 ○廉恥：本名譽  
 を厭ふ。



○豈果無其人哉  
：どうして本  
當にさういふ人  
がないであらう  
かないことばあ  
るまい。

何少也。豈果無其人哉。

返點附本文

嗚呼五代之亂極矣。傳所謂天地閉、賢人隱之時與。當此時。臣弑其君。子弑其父。而搢紳之士。安其祿而立其朝。充然無復廉恥色者。皆是也。吾以觀自古忠臣義士。多出於亂世。而怪當時可道者何少也。豈果無其人哉。

讀方 嗚呼五代之亂極る、傳に所謂天地閉ぢ、賢人隱るゝの時か、此時に當りて、臣其君を弑し、子其父を弑す。而して搢紳の士、その祿に安じて朝に立つ。充然として復廉恥の無き者、皆これなり。吾もへらく、古より忠臣義士、多くは亂世に出づ、而して、怪む當時道ふべきもの何ぞ少き。豈果してその人なからんや。

解答 實に五代の時の國の亂れた有様は實に極點に達した。易の坤卦文言に「天地閉ぢ、賢人隱る」といふ語があるが、この五代當時はこの言葉で形容すべき時であらうか。この時代には、家來はその君を弑し、子は自分の父を弑して居るそして身分のよい人々は、俸祿を平氣で貰つて朝廷に仕へて居る、そして世の中の亂れて居ることについては何も云はず空しくその位に居つて、少しも恥を知る心がない。自分は心の中に君に忠をつくす臣下、正しい道を行ふ人は大抵世の亂れた時に出るものであるが、不思議にも五代時代には特にいひたてるべき程の忠臣義士が如何にも少い、實際なかつたのであらうか、ないことばあるまいと思ふて居る。

應用 從政者皆知廉恥

問 題

【三十七】 孔子孟軻之不遇。老於道途。而不倦不慍。不忤不沮者。夫固知夫責之所在也。

返點附本文

○不遇：時勢にあはない。  
○慍：心の中に怒ること。



○相：意氣のくちけること。

孔子孟軻之不遇。於道途。而不倦不慍。不忤不沮者。夫固知夫責之所<sub>レ</sub>在也。

讀方 孔子孟軻の不遇にして、道途に老いて、倦まず慍らず、忤ぢず沮まざるものは、それもとより夫の責の在る所を知ればなり。

解答 孔子や孟子のやうな聖人賢人でも、時勢に遇はず、採用して貰ふべき明君を見出すこともできず、諸國を歴遊して空しく老年に達したが、その信ずる道を説いて倦むことなく心中に怒を合むこともなく、心にはぢることもなく、落膽することも無いのは、勿論自分の本分のある所を知つて居たからである。

應用 爲<sub>レ</sub>衆沮嘗不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>行

問 題

【三十八】 今<sub>レ</sub>之不肖。何敢自列於聖賢。然其心亦有所甚不自輕者。何則天下之者。孰不欲一蹴而造聖人之域。然及其不成也。求一言之幾乎道。而不可得也。

○不肖……愚なこ  
と。  
○執不<sub>レ</sub>欲<sub>三</sub>一蹴<sub>二</sub>而<sub>レ</sub>造<sub>レ</sub>聖人之域<sub>一</sub>。

返點附本文

今<sub>レ</sub>之不肖。何敢自列<sub>二</sub>於聖賢<sub>一</sub>。然其心亦有所甚不自輕者。何則天下之者。孰不欲一蹴而造<sub>二</sub>聖人之域<sub>一</sub>。然及其不成也。求一言之幾乎道。而不可得也。

讀方 今<sub>レ</sub>之不肖、何ぞ敢て自ら聖賢に列せん。然れども、その心亦甚自ら輕んぜざる所のものあり。何となれば、天下の學者、孰れか一蹴して聖人の域に造るを欲せざらん。然も、その成らざるに及んでや、一言の道に幾きを求めて、得べからざるなり。

解答 今<sub>レ</sub>のやうな愚なものが何しに、自分を聖人賢人と同一視しようか。けれども自分の心の中には少しも自分の身を輕んぜず、天與の本分を尊重して居る。何故であるかと云へば世の中の學者は皆一躍して、聖人の區域に入らうと願はないものはない。けれども聖人

造<sub>二</sub>聖人之域<sub>一</sub>：疑問代名詞「執」を反語として用ゐたのである。  
「たれが一びに聖人にならうと思はないであらうか、だれでもならうと思ふ」の意。

○幾：近い。



の區域に入ることが出来ないときには、責めて一言でも聖人の道に適ったことをいひたいと思ふがそれすらできないのである。

應用 何足知<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

問 題

○轅門：：車の轅を列べて臨時につくつた門、軍門の意。

○三軍：：大將の率ゐる軍は三軍、天子の率ゐる軍は六軍、一軍は一萬二千五百人、この意。

○股慄：：ふるふる上る。

○臨淮之悍：：李

【三十九】 昔者郭子儀去河南。李光弼實代之。將至之日。張用濟斬於轅門。三軍股慄。夫以臨淮之悍。而代汾陽之長者。三軍之士。竦然如赤子脫慈母之懷。而立乎嚴師之側。何亂之敢生。

返點附本文 昔者郭子儀去河南。李光弼實代之。將至之日。張用濟斬於轅門。三軍股慄。夫以臨淮之悍。而代汾陽之長者。三軍之士。竦然如赤子脫慈母之懷。而立乎嚴師之側。何亂之敢生。

昔者郭子儀去河南。李光弼實代之。將至之日。張用濟斬於轅門。三軍股慄。夫以臨淮之悍。而代汾陽之長者。三軍之士。竦然如赤子脫慈母之懷。而立乎嚴師之側。何亂之敢生。

○汾陽之長者：：郭子儀、汾陽王に封ぜらる。汾陽王に封ぜらる。汾陽王に封ぜらる。汾陽王に封ぜらる。

○光弼臨淮王に封ぜらる。悍はたけしい意。

讀方 昔者郭子儀河南を去る。李光弼實に之に代る。將に至らんとするの日、張用濟轅門に斬られて、三軍股慄す、それ臨淮の悍を以てして汾陽の長者に代り、三軍の士、竦然として赤子慈母の懷を脱して嚴師の側に立つが如し。何の亂かこれ敢て生ぜん。

解答 昔郭子儀が河南の節度使をやめて、李光弼が之に代つて河南の節度使になつた。李光弼が任につかうとした日に、張用濟といふものが軍門で斬られ全軍の人々は李光弼のやり方に恐れ戦いた。あのやうに氣のあらい李光弼が、穩やかな郭子儀と代つたのであるから部下の軍隊の人々はおそれて、赤子がなまけ深い母の懷を離れて、きびしい先生の前に立つたやうなものである。それ故に亂が起るなどいふことは決してないのである。

應用 義勇冠三軍

問 題

【四十】 我非君也。非吏也。執塗之人而告之曰。某爲善某爲惡。可也







應用 蚩尤以金作兵。

問 題

四十二 嗚呼以賂秦之地封天下之謀臣。以事秦之心禮天下之奇才。并力西嚮。則吾恐秦人食之不得下咽也。

返點附本文

嗚呼以賂秦之地。封天下之謀臣。以事秦之心。禮天下之奇才。并力西嚮。則吾恐秦人食之不得下咽也。

讀方 嗚呼秦に賂するの地を以て天下の謀臣を封じ、秦に事ふるの心を以て天下の奇才を禮し、力を并せて西に嚮はゞ、則ち吾秦人の食これ咽に下るを得ざるを恐るゝなり。

解答 實に秦に賂路として贈るだけの土地でもつて世の中の智謀に勝れた家來を抱へ、秦に

○謀臣：智謀ある家來。  
○奇才：才智勝れた人。  
○吾恐秦人食之不得下咽也：秦人が心配のあまり食物が咽を通らないであらう。

つかへる心持を以つて世の中の才智の勝れた人を禮遇し、協力して西の方秦に向つたなら自分は秦の人々が心配の餘、食物さへもよう咽に通らなかつたらうと思ふのである。

應用 父事之。

問 題

四十三 漢高帝。挾數用術以制一時之利害。不如陳乎。揣摩天下勢。舉指搖目。以却制項羽。不如張良。微此二人。則天下不歸漢。而高帝乃木彊之人而止耳。

返點附本文

漢高帝。挾數用術以制一時之利害。不如陳乎。揣摩天下勢。舉指搖目。以却制項羽。不如張良。微此二人。則天下不歸漢。而高帝乃木彊之人而止耳。

讀方 漢の高帝、數を挾み、術を用ひて一時の利害を制するは陳乎に

○挾數用術：數用術を以て。  
○制：こゝでは捌く。  
○揣摩：おしはかる。  
○舉指搖目：自分坐つたまゝ、指や目で人を指さす。  
○制：おさへつける。  
○木彊之人：無能な人。



如かず、天下の勢を揣摩し、指を擧げ目を搖して以て項羽を却制するは張良に如かず。此二人なかりせば、則ち天下漢に歸せず。而して高帝は乃ち木彊の人にして止まんのみ。

解答 漢の高祖は、策略を行つて一時の利害をとり捌く點に於ては陳平にかなはない。世の中の様子も推量し、坐して人を指揮しおびやかし、抑へつける點に於ては張良にかなはない。この陳平張良の二人が居なかつたら、天下は漢のものとはならず、高祖は何もはたらきのない人として終つたであらう。

應用 善治天下者、揣摩諸侯之情、

問 題

【四十四】 今有三人焉。一人勇。一人勇怯半。一人怯。有與之臨乎淵谷者。且告之曰。能跳而越此。謂之勇。不然爲怯。彼勇者恥怯。必跳而越焉。其勇怯半者與怯者則不能也。又告之曰。跳而越者與千金

○奔利…利益のためにつられて。  
○賔賈…大道  
○豈有勇怯哉…

疑問代名詞「豈」を反語として用ゐ、終詞「哉」と連用して反語としたのである。一何しに勇怯の區別があらうかそんな區別はないのである」の意。

不然則否。彼勇怯半者奔利。必跳而越焉。其怯者猶未能也。須臾顧見猛虎暴然向逼。則怯者。不待告跳而越之。如賔賈矣。然則人豈有勇怯哉。要在以勢驅之耳。

返點附本文

今有三人焉。一人勇。一人勇怯半。一人怯。有與之臨乎淵谷者。且告之曰。能跳而越此。謂之勇。不然爲怯。彼勇者恥怯。必跳而越焉。其勇怯半者與怯者則不能也。又告之曰。跳而越者與千金不然則否。彼勇怯半者奔利。必跳而越焉。其怯者猶未能也。須臾顧見猛虎暴然向逼。則怯者。不待告跳而越之。如賔賈矣。然則人豈有勇怯哉。要在以勢驅之耳。

讀方 今三人あり、一人は勇、一人は勇怯半す、一人は怯。之と淵谷



に臨む者あり、且つ之に告げて曰く、能く此を越ゆる、之を勇といふ。然らずば怯となすと。彼の勇者怯を恥ぢ、必ず跳つて越えん。其勇怯半する者と怯者とは則ち能はざるなり。又之に告げて曰く、跳つて越ゆる者には千金を興へん、然らずば則ち否らずと。勇怯半するものは利に走り跳つて越えん。彼の勇怯者は猶未だ能はざるなり。須臾にして願みて猛虎の暴然として向ひ逼らんとするを見れば、則ち怯者、告ぐるを待たずして跳つて之を越えんこと康莊の如くならん。然らば副ち人豈勇怯あらんや。要するに勢を以て之を驅るにあり。

解答 今こゝに三人の人が居る。一人は勇氣のある人、一人は普通の人、一人は臆病な人である。この三人と一緒に谷の傍へ行つたものがある、そして三人に向つて「此谷を飛び越えるものは勇者である、飛び越えることのできぬものは臆病者である」と言つたなら、あの勇氣のある人は、きつと臆病と言はれることを恥ぢてその谷を跳り越えるであらう。普

○威公…齊桓公  
○訖…なる。  
○寧歲…やすらかな歳。

進の人と臆病な人とは越えることが出来ないものである。又「跳り越えるものには一千金をやらう、越えなければやらぬ」と云つたら、あの普通の人は、利益を得たいために、きつと跳り越えるであらう、臆病な方の人は、それでもまだどう飛び越えることが出来ないのである。忽ち振りかへつて見ると、猛しい虎が、俄に近よつて来たならば、その臆病な人は黙つて居ても大道で飛ぶときのやうに谷を跳り越えるであらう。かういふ點から見れば、人間には、勇氣ある人とか臆病な人とかの區別はないのである。つまり、その時の様子によつて動かされるのである。

問 題

富

【四十五】 管仲相威公。霸諸侯。○攘戎夷。終其身齊國強。諸侯不叛。管仲死。豎刁。易牙。開方用。威公薨於亂。五公子爭立。其禍蔓延。訖簡公齊無寧歲。

蔓

返二附本文



管仲相<sub>レ</sub>威公<sub>一</sub>。霸<sub>レ</sub>諸侯<sub>一</sub>。攘<sub>レ</sub>戎夷<sub>一</sub>。終<sub>レ</sub>其身<sub>一</sub>。齊國強<sub>一</sub>。諸侯不<sub>レ</sub>叛<sub>一</sub>。管仲死<sub>一</sub>。豎刁<sub>一</sub>。易牙<sub>一</sub>。開方用<sub>一</sub>。威公薨<sub>レ</sub>於亂<sub>一</sub>。五公子爭<sub>レ</sub>立<sub>一</sub>。其禍蔓延<sub>一</sub>。訖<sub>レ</sub>簡公<sub>一</sub>。齊無<sub>レ</sub>寧歲<sub>一</sub>。

讀方 管仲威公に相とし、諸侯に霸として戎夷を攘ひ、其身を終るまで、齊國富強、諸侯叛かず、管仲死し、豎刁、易牙、開方用ひられ威公亂に薨じ、五公子立たんことを争ふ。其禍蔓延して、簡公に訖るまで齊に寧歲なし。

解答 管仲は齊の桓公の總理大臣となつて、齊の國を諸侯の旗頭とし、野蠻人を逐ひ、管仲の生きて居る間は齊の國は財政も樂で、兵力も強かつた。管仲が死んで後、豎刁とか、易牙とか、開方の連中が採用せられ、桓公が薨じる時には齊の國は漸く亂れるやうになり、桓公の薨じてのちは、桓公の五人の子即ち、武孟、元潘、商人、雍、昭の五人が、桓公の後を繼がうと争ひ、その悪影響を受けて、桓公の十一世の孫簡公の時代まで齊の國には平和な歳がなかつた。

應用 不<sub>レ</sub>違<sub>一</sub>寧歲<sub>一</sub>。

問 題

【四十六】 治天下者定所尙。所尙一定。至於千萬年而不變。使民之耳目純於一。而子孫有所守。易以爲治。

の定<sub>レ</sub>所尙<sub>一</sub>。方針として定むべき所を一定する。純<sub>レ</sub>於<sub>一</sub>。一に純らばかりむげ。

返點附本文

治<sub>レ</sub>天下<sub>一</sub>者定<sub>レ</sub>所尙<sub>一</sub>。所尙<sub>一</sub>一定。至<sub>レ</sub>於<sub>一</sub>千萬年<sub>一</sub>而<sub>レ</sub>不變<sub>一</sub>。使<sub>レ</sub>民之<sub>一</sub>耳目純<sub>レ</sub>於<sub>一</sub>一<sub>一</sub>。而<sub>レ</sub>子孫有<sub>レ</sub>所守<sub>一</sub>。易<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>治<sub>一</sub>。

讀方 天下を治むる者尙ぶ所を定む。尙ぶ所一に定まれば、千萬年に至つて變ぜず。民の耳目をして一に純にして、子孫をして守る所有らしめば、以て治をなし易し。

解答 天下を治めるものは、第一に天下の人々が方針として尙ぶ所のものゝを定める。方針と



して尊ぶ所が一定すれば、千萬年たつても方針として守るべき所を變へず、天下の人民の心を一つの定まつた所に向け、子孫の國是として守るべき所を定めたならば、天下は治め易いのである。

應用 夏后氏尙<sub>レ</sub>黑

問 題

【四十七】 夫齊古之疆國也。而威王又齊之賢王也。當其即位。委政不治。諸侯並侵。而人不知其國爲疆國也。一旦發怒裂萬家。封即墨大夫。召魯阿大夫。與常譽阿大夫者。而發其擊趙魏衛。趙魏衛盡走請和。而齊國人人震懼。不敢飾非。彼等知其政之弱。而能用其威。以濟其弱也。

返點附本文

夫齊古之疆國也。而威王又齊之賢王也。當其即位。委政不治。

○疆國……強國。  
○蒸……煮殺す。  
○不<sub>レ</sub>敢飾<sub>レ</sub>非……  
（不）といふ打消助動詞が「敢」の上にあるから打消となる。  
○弱……弱點。  
○威……威力。

濟補

諸侯並侵。而人不知其國爲疆國也。一旦發怒裂萬家。封即墨大夫。召魯阿大夫。與常譽阿大夫者。而發其擊趙魏衛。趙魏衛盡走請和。而齊國人人震懼。不敢飾非者。彼等知其政之弱。而能用其威。以濟其弱也。

讀方 それ齊は古の疆國なり、而して威王は又齊の賢王なり。その位に即くに當つて、政を委して治めず、諸侯並び侵して、人その國の疆國たるを知らざるなり。一旦怒を發して萬家を裂き、即墨大夫を封ず。召して阿大夫と常に阿大夫と譽むる者とを烹、兵を發して趙魏衛を撃ち、趙魏衛盡く走つて和を請ふ。而して齊國人人震懼し敢て非を飾らざる者は、彼誠に其の政の弱を知つて、能くその威を用ひ、以てその弱を濟へばなり。



解答 一體齊國は昔の強國である、そして桓公は又齊國の賢君である。その位についたときには政治を臣下に任せて自ら政治をとらず、諸侯は齊の國にかはるゝ攻めこみ、天下の人は齊國が強國であるといふことを知らなかつたのである。所が桓公は諸侯が齊國に侵入するのを見て大に怒り、萬家の土地を裂いて即墨の大夫を封じ、阿大夫と阿大夫を譽めた者と呼び寄せて烹殺し、軍隊を派遣して趙魏衛の諸國を攻めた。趙魏衛の諸國は皆敗北して和睦を願つた。そして齊國の人々も桓公の威勢に怖れて、自分達の悪い所を秘さなくなつた。これは齊桓公が實にその政治の弱點を知つて、うまくその威力を用ひて、その弱點を補つたからである。

應用 不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>辭<sub>一</sub>也

問 題

【四十九】 輪輻蓋軫。皆有職乎車。而軾獨若無所爲者。雖然去軾則吾未見其爲完車也。軾乎吾懼汝之不外飾也。天下之車莫不由轍。而言車之功轍不與焉。雖然。車仆馬斃而患不及轍。是轍者禍福之間。轍乎吾知免矣。

○輪輻蓋軾……車の輪と車の輪の中心から射出して居る木と輓と車の後の横木。

乎吾知免矣。

返點附本文

輪輻蓋軾。皆有職乎車。而軾獨若無所爲者。雖然去軾則吾未見其爲完車也。軾乎吾懼汝之不<sub>レ</sub>外飾也。天下之車莫<sub>レ</sub>不由<sub>レ</sub>轍。而言<sub>レ</sub>車之功<sub>一</sub>轍不<sub>レ</sub>與焉。雖然。車仆馬斃而患不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>轍。是轍者禍福之間。轍乎吾知<sub>レ</sub>免矣。

讀方 輪輻蓋軾は、皆車に職とするあり。而して軾獨爲す所のものなきが若し。然りと雖も、軾を去れば則ち吾その完車たるを見ざるなり。軾か吾汝の外飾せざるを懼る。天下の車轍に由らざるなし。而して車の功をいへば轍與らず。然りと雖も、車仆れ、馬斃れて患轍に及ばず。これ轍は禍福の間、轍か吾免れんことを知る。

○軾……車の前の横木。  
○完車……完全な車。  
○輻……わだち。  
○仆……ひっくりかへる。



解答 車の輪や、輪の中心のから射出して居る木や、輓や、車の後の横木などは、車に對して各自役目とする所がある。そして只あの式體をするために居る車の前の横木だけは、何も車に對する役目がないやうに見える。けれども、その車の前の横木をとり去れば完全な車と云へないのである。自分はこの車の前の横木即ち軸をもつて名前とした自分の長男が矢張り世の中に無くてはならぬ人間であり乍ら、外見を飾らぬために、無用なものとして扱はれはせぬかと心配する。世の中の車は皆わだちを必要としないものはない。しかし車の功用をいふときには軸の功用をいふものはない。けれども車が倒れ、これをひく馬も斃れるといふやうなときには、その車は壞れてしまつても、軸だけは何も災を受けない。この轍をもつて名付けた自分の次男も、禍福の間になつてその影響を受けず、無事で居ることが出来るだらうと思ふ。

應用 月形如<sub>二</sub>白盤<sub>一</sub>、完<sub>上</sub>東<sub>一</sub>。

問 題

【四十九】 臣願陛下明敕有司。議之以<sub>二</sub>法言<sub>一</sub>。取之以<sub>二</sub>實學<sub>一</sub>。博通經術者。雖朴不廢。稍涉浮議者。雖工必黜。則風俗近厚。學術近正。庶幾得<sub>二</sub>忠實之士<sub>一</sub>。不至蹈衰季之風。則天下幸甚。

○有司……役人。  
○法言……正しい

忠實之士。不至蹈衰季之風。則天下幸甚。

返點附本文

臣願陛下明敕有司。議之以<sub>二</sub>法言<sub>一</sub>。取之以<sub>二</sub>實學<sub>一</sub>。博通經術者。雖朴不廢。稍涉浮議者。雖工必黜。則風俗近厚。學術近正。庶幾得<sub>二</sub>忠實之士<sub>一</sub>。不至蹈衰季之風。則天下幸甚。

言。  
○實學……實用上の學問  
○經術……儒教の經典から得た政治上の才能  
○朴……飾氣のないこと、  
○浮議……浮薄な議論  
○工……巧  
○黜……官を退ける。  
○庶幾……どうか  
○衰季……道德の衰へた世。

讀方 臣願はくば陛下明らかに有司に敕して、之を議するに法言を以てし、之を取るに實學を以てし博く經術に通ずる者は、朴と雖も廢せず、稍や浮議に涉る者は、工と雖も必ず黜くるときは、則ち風俗厚に近く、學術正に近し。庶幾くは、忠實の士を得、衰季の風を蹈ひに至らざれば、則ち天下の幸甚ならん。

解答 私に陛下が役人にしつかりと申し付けられて、正しい言論をもつてはかり、實用の學



問あるものを採用し、博く儒教の經典から政治上のはたらきを得たるものは、飾り氣のない人物でも捨てずいくらか浮薄な議論をするものは、うまいことを言つても、退けてしまふときは、人々の習俗が次第に手厚くなり、學問藝術も正しくなる、どうか、眞面目な學問あり道理に明らかな人物を得て、濤季の風俗にならぬやうになれば、天下の人々にとつて非常な幸福であらうと思ひます。

應用 安石外示ニ朴野、中藏ニ巧詐。

問 題

【五十】 然而臣之爲計可謂愚矣。以螻蟻之命。試雷霆之威。積其狂愚。豈可屢赦。大則身首異處。破壞家門。小則削籍投荒。流離道路。

返點附本文

然而臣之爲計可謂愚矣。以螻蟻之命。試雷霆之威。積其狂愚。豈可屢赦。大則身首異處。破壞家門。小則削籍投荒。流離道路。

○螻蟻……「けら」とあり  
○雷霆……いかづち  
○積其狂愚……雷霆をしくす  
○豈可屢赦……どうして度々ゆるされようかゆるされない  
○「豈」を反語とし

たのである。

○自首異處……斬罪に處せられる

○破壊家門……一家を滅される

○削籍……臣籍をのぞく

○投荒……邊境に逐はれる

○流離……さすらへる

○限……こゝでは謙遜の意味をあらはす

讀方 然り而して臣の計を爲す愚と謂ふべし。螻蟻の命を以て雷霆の威を試み、その狂愚を積む。豈屢赦さるべけんや。大なれば則ち首處を異にし、家門を破壊せられん。小なれば則ち籍を削り荒に投ぜられて道路に流離せん。

解答 扱て私が陛下に對して計を奉るのば誠に馬鹿げたことである。譬へば螻や蟻の分際で恐ろしい雷の威光を試すやうな馬鹿げた振舞である。このやうなことを繰かへせばとてもお赦を受ける筈がない。重く罰せられれば、死刑に處せられ、一家を滅されるであらう。たとへ軽く罰せられた所が臣籍を除かれて邊境に逐はれ、路に彷徨ふでありませう。

應用 豈樂飲酒

問 題

【五十一】 臣等猥以空疎。備員講讀。聖明天縱。學問日新。臣等才有限而道無窮。心欲言而口不逮。以此自愧。莫知所爲。



○空疎……學力乏しく世事に疎いこと。  
 ○備員講讀……陛下に書物を講ずる人員の中に加はり。  
 ○天縱……天から許された。  
 ○聖明……陛下の徳の明らかなこと。

返點附本文

臣等狼狽以空疎。備員講讀。聖明天縱。學問日新。臣等才有限而道無窮。心欲言而口不逮。以此自愧。莫知所爲。

讀方 臣等狼狽に空疎を以て、員に講讀に備はる、聖明天縱にして、學問日に新なり。臣等才限ありて道窮なし。心言はんことを欲して口逮ばず。これを以て自ら愧ぢ、爲す所を知るなし。

解答 私共は學力乏しく世事に疎い身をもつて、陛下に書物を講ずる人員中に加へられてゐる。陛下は天より許された徳を備へ、學問は日々に進歩される。私共の學才は限りがあり陛下の修められる學問は限りがない。私共は心の中で言はうと思つても口で言ひあらはすことが出来ない。かういふわけであるから自身に恥かしく感じてどうしてよいか解りませぬ。

應用 狼狽に空疎、三顧に臣草廬之中。

問 題

【五十二】 臣聞之。孔子曰。苛政猛於虎。昔常不信其言。以今觀之。

殆有甚者。

返點附本文

臣聞之。孔子曰。苛政猛於虎。昔常不信其言。以今觀之。殆有甚者。

讀方 臣これを聞く。孔子曰く、苛政は虎より猛なりと。昔は常にその言を信ぜず。今を以て之を觀れば、殆ど甚しき者あり。

解答 私は孔子が殘酷な政治の害は虎の害よりも恐るべきものであるといつたと聞いてたが以前は全くそのことを信用しなかつた。しかし今の様子を見ると、成程虎の害以上の害があるといつてよろしう。

應用 枝大於本。

○苛政……暴虐な政治。  
 ○常不信其言……常……副詞「常」が打消助動詞「不」の上にあるから積極的打消になり「いつでもその言を信用しない」といふ意味になる。これが「不」の方が上に來て「不」が「常」の「信」の「言」となれば消極的打消となつて「信する」ともあり「信じない」ともあつて「不信」の意となる。



○經術……儒教の  
經典から得た政  
治上の才能。

○小臣……こゝで  
は身分の低い官  
吏、  
○人主……人君。

問 題

【五十三】 蓋親儒臣。尊經術。不以小臣而廢其言。故狄山得與張湯爭議上前。此人<sup>○</sup>之所甚難。而人主所欲聞也。

返點附本文

蓋親<sup>シ</sup>儒臣<sup>ニ</sup>。尊<sup>ビ</sup>經術<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>小臣<sup>ニ</sup>而廢<sup>セ</sup>其言<sup>ヲ</sup>。故狄山得<sup>テ</sup>與<sup>ニ</sup>張湯<sup>ニ</sup>爭<sup>ヒ</sup>議<sup>ス</sup>上前<sup>ニ</sup>。此人<sup>○</sup>之所甚難<sup>シ</sup>。而人主所<sup>レ</sup>欲<sup>シ</sup>聞<sup>カ</sup>也。

讀方 蓋、儒臣を親み、經術を尊び、小臣を以て其言を廢せず。故に狄山張湯と上の前に爭議するを得。これ人臣の甚難しとする所にして、人主の聞かんと欲する所なり。

解答 思ふに、儒學を修めた臣下に親み、儒教の經典から得た政治上のはたらきを大切にし、官位の低い者のいふことでも捨てない。それ故狄山は張湯と天子の御前で討論することができた。このことは臣下として甚しがたいことで、しかも君主の聞きたいと思ふ所のもの

である。

應用 尊<sup>ニ</sup>修<sup>レ</sup>經術<sup>ヲ</sup>。親<sup>ニ</sup>近<sup>ス</sup>仁人<sup>ニ</sup>。

問 題

【五十四】 傳曰。賞疑從與。所以<sup>○</sup>廣恩也。罰疑從去。所以<sup>○</sup>慎刑也。

返點附本文

傳曰。賞疑從<sup>レ</sup>與<sup>ニ</sup>。所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>廣<sup>ク</sup>恩<sup>ヲ</sup>也。罰疑從<sup>レ</sup>去<sup>ニ</sup>。所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>慎<sup>ク</sup>刑<sup>ヲ</sup>也。

讀方 傳に曰く、賞の疑はしきは與ふるに従ふ。恩を廣うする所以なり。罰の疑はしきは去るに従ふ、刑を慎む所以なり。

解答 書經の孔安國の傳文に、賞を與へるべきか與ふべからざるかはつきり解らぬときには賞を與へておけば、恩恵を廣く下のものに與へることになる。罰すべきか罰すべからざるかはつきり解らぬときには、罰しないでおけば、刑罰を慎重に考へて行ふことになるのである。

○傳……賢人の書  
を「傳」といふこ  
とは孔安國の書  
經の傳文である



應用 賢人之書曰傳。

問 題

【五十五】 君子之所以大過人者。非以其智能知之。彊能行之也。以其功與而民勞。與之同勞。功成而民樂。與之同樂。如是而已矣。

返點附本文

君子之所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>大過<sub>レ</sub>人者。非<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>其智能<sub>レ</sub>知之。彊能<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之也。以<sub>レ</sub>其功與<sub>レ</sub>而民勞。與<sub>レ</sub>之同<sub>レ</sub>勞。功成<sub>レ</sub>而民樂。與<sub>レ</sub>之同<sub>レ</sub>樂。如<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>而已矣。

讀方 君子の大いに人に過ぐる所以のものは、その知能く之を知り、彊能く之を行ふを以てするにあらざるなり。その功與つて民勞し、之と勞を同らし、功成つて民樂み、之と樂を同じうするを以てかくの如きのみ。

○彊能行<sub>レ</sub>之……  
勉強して之を行ふ。  
○功……こゝは事業。  
○勞……骨折る。

解答 盛徳の人が非常に普通の人よりも勝れてゐるのは、智を以て知り、勉強して事を行ふからではない。事業が興つて人民がはたらけば、人民と同じやうにはたらき、事業が成就して人民が樂めば人民と一緒に樂むからである。

應用 彊勉行<sub>レ</sub>道。

問 題

【五十六】 嗚呼亂臣賊子。猶蝮蛇也。其所螫草木。猶足以殺人。況其所噬齧者歟。

【返點附本文】

嗚呼亂臣賊子。猶<sub>レ</sub>蝮蛇<sub>レ</sub>也。其所<sub>レ</sub>螫<sub>レ</sub>草木。猶<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>人。況其所<sub>レ</sub>噬齧<sub>レ</sub>者歟。

讀方 嗚呼亂臣賊子、猶蝮蛇のごときなり。その螫す所の草木、猶以

○亂臣賊子……君を弑する臣、父を害する子。  
○蝮蛇……まむし毒蛇。  
○螫……蛇は噛むので「さす」のはなすがこゝは「さす」と書いてある。  
○噬齧……かみつ



て人を殺すに足れり。況やその噬齧する所の者をや。

解答 實に臣下であり乍ら君を弑し、子でありながら父を害するものは、螻のやうなものである。螻の毒は劇しいものでそのくひついた草や木でも人を殺すに足る毒があるのである。まして直接人にくひつけば人はすぐと死ぬのである。亂臣賊子はこの螻に譬ふべきものである。

應用 況於鬼神乎

問題

【五十七】 商鞅用於秦。變法定令。行之十年。秦民大悅。道不拾遺。

山無盜賊。家給人足。民勇於公戰。怯於私鬪。秦人富強。天子致胙於孝公。諸侯畢賀。

返點附本文

商鞅用於秦。變法定令。行之十年。秦民大悅。道不拾遺。山

○變法定令……法令を變へたり新につくつたりする。  
○道不拾遺……法律が嚴重なもので、道路に落ちたものがあつても拾はない。  
○公戰……國家の

ための戦争。  
○私鬪……個人同志の争。  
○胙……祭のときの餘肉。

無盜賊。家給人足。民勇於公戰。怯於私鬪。秦人富強。天子致胙於孝公。諸侯畢賀。

讀方 商鞅用ひられ、法を變じ令を定む。之を行ふ十年、秦の民大いに悦び、道遺を拾はず、山に盜賊なく、家々給し、人々足り、民公戰に勇にして、私鬪に怯に、秦人富強。天子胙を孝公に致し、諸侯畢く賀すと。

解答 商鞅が秦に用ひられて、法令を改良し、これに従つて十年間政治を行つた所が、秦の人民は非常に悦び、道に遺ちたものがあつても拾ふものなく、山に盜賊が籠ることもなく、どの家も暮しが樂になり、貧乏人がなくなり、人民は國のためには勇敢に戦ひ、私争を避け、秦人の財政は豊に、兵力も強くなり、天子が文王武王を祭るとき用ひた肉を秦の孝公に贈り、諸國の殿様は皆孝公に賀意を表した。

應用 高祖取楚如拾遺。



○問疎……仲を割いた。  
○有私……内通する。  
○賜骸骨……辭職させて下さい。  
○道……腫物の深いもの。

問 題

【五十八】漢用陳平計開疎楚君臣。項羽疑范增與漢有私。稍奪其權。增大怒曰。天下事大定矣。君王自爲之。願賜骸骨歸卒伍。歸未至彭城。疽發背死。

返點附本文

漢用ニ陳平ノ計ニ開ニ疎楚君臣。項羽疑ニ范增與レ漢有私。稍奪ニ其權。增大怒曰。天下事大定矣。君王自爲レ之。願賜ニ骸骨。歸ニ卒伍。歸未至ニ彭城。疽發レ背死。  
讀方 漢、陳平の計を用ひて楚の君臣を間疎す。項羽范增漢と私あるかと疑ひ稍やその權を奪ふ。増大いに怒つて曰く、天下の事大いに定れり。君王自ら之を爲せ。願くば骸骨を賜ひて卒伍に歸らんと。

歸つて未だ彭城に至らざるに、疽背に發して死す。

解答 漢が陳平の計を用ひて、楚の君臣を仲違ひするやうにした。楚の項羽は、臣下の范增が漢の方と内通してゐるのではないかと疑つて、いくらかその權力をとりあげた。范增は非常に怒つて、天下の形勢はもう大體定まつてしまつた。貴方御自身勝手になさい、どうか私は辭職して元の平民になりたい」と項羽に言つて、歸つてまだ彭城に着かない中に、背中に悪性の腫物が出来て死んだ。

應用 以ニ老病ニ乞ニ骸骨。

問 題

【五十九】古之所謂豪傑之士者。必有過人之節。人情有所不能忍者。匹夫見辱拔劍而立。搥身鬪。此不足爲勇也。天下有大勇者。卒然臨之而不驚。無故加之而不怒。此其所挾持者甚大。而其志甚遠也。

返點附本文

古之所謂豪傑之士者。必有過人之節。人情有所不能忍者。匹

○節……操……守る所。  
○匹夫……つまりぬ男。  
○搥身……身を蹴らす。  
○卒然……だしぬ



けに。  
○挾持……もつて  
居る……胸の中  
にもつて居る度  
量。

夫見<sup>レ</sup>辱拔<sup>レ</sup>劍而立。挺<sup>レ</sup>身鬪。此不<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>勇也。天下有<sup>二</sup>大勇者<sup>一</sup>卒  
然臨<sup>レ</sup>之而不<sup>レ</sup>驚。無<sup>レ</sup>故加<sup>レ</sup>之而不<sup>レ</sup>怒。此其所<sup>レ</sup>挾持<sup>二</sup>者甚大<sup>一</sup>。而其志  
甚遠也。

讀方 古の所謂豪傑の士は、必ず人に過ぎたるの節あり。人情の忍ぶ  
能はざるの所のものあり。匹夫辱めらるれば劍を抜いて立ち、身を  
挺して鬪ふ。これ勇となすに足らざるなり。天下大勇のものあり。  
卒然これに臨めども驚かず、故なく之に加へて怒らず。これその挾  
持すな所のもの甚大にしてその志甚遠ければなり。

解答 昔の世にいふ勝れた人は、必ず常人以上の確と守る所をもつて居る。常人の忍ぶこと  
のできぬことを忍んで居る。俗人が他の人から恥を與へられると怒り怒つて、すぐ劍を抜  
いて立ちあがり身を翻して争ふ。こんなことは勇氣があるとは云へぬのである。世の中に  
は眞に勇氣をもつて居る者がある。かういふ人は突然のことがあつても驚かず、理由のな

いのに他の人が無禮なことをしても怒らない。これはさういふ人は胸中にもつて居る度量  
が大きく、志が甚遠大であるからである。

應用 亡<sup>シ</sup>以<sup>ツ</sup>應<sup>ズ</sup>卒。

問題

【六十】 天下治亂皆有常勢。是以天下雖亂。而聖人以爲無難者。其應  
之有術也。

返點附本文

天下治亂皆有<sup>二</sup>常勢<sup>一</sup>。是以天下雖<sup>レ</sup>亂。而聖人以爲<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>難者。其應<sup>レ</sup>之  
有<sup>レ</sup>術也。

讀方 天下の治亂皆常勢あり、これを以つて天下亂ると雖も、聖人以て  
難なしとなすもの、其これに應ずる術あるなり。

解答 世の中が治り或は亂れるといふことについては一定の趣がある。それ故世の中が亂れ

○常勢……一定の  
趣。  
○術……方法。



る時に、聖人はこれを處理して治めにくくないといふのは、聖人は之に應ずる方法を知つて居るからである。  
應用 之仁術也。

問 題

【六十一】 及至後也。用迂儒之議。以去兵爲王者之盛節。天下既定。則卷甲而藏之。數十年之後。甲兵頓弊。而人民日以安於佚樂。卒有盜賊之警。則相與恐懼訛言。不戰而走。

返點附本文

及至後世。用迂儒之議。以去兵爲王者之盛節。天下既定。則卷甲而藏之。數十年之後。甲兵頓弊。而人民日以安於佚樂。卒有盜賊之警。則相與恐懼訛言。不戰而走。

○迂儒……迂遠な儒學者。  
○盛節……立派な道。  
○頓弊……破れ損じる。  
○佚樂……氣儘安樂。  
○訛言……口も利けない。

讀方 後世に至るに及んで、迂儒の議を用ひ、兵を去るを以て王者の盛節となし、天下既に定れば、則ち甲を卷いて之を藏ひ。數十年の後、甲兵頓弊して、人民日に佚樂に安んじ、卒に盜賊の警あれば、則ち相與に恐懼訛言し、戰はずして走る。

解答 後世になつて、迂遠な儒者の説を採用して、戰爭をやめることを王たるもの、最立派な道として、天下を取ると、鏝は卷いて藏つてしまふ。五六十年後には、鏝も武器も破れ損じて、人民は毎日、氣儘安樂な生活をし、急に盜賊があるといふ警戒を聞くと、皆懼ぢ怖れ疎に口も利けず、戰はない中に逃げ出す。

應用 盛名之下、其實難副。

問 題

【六十二】 夫今之所患兵弱而不振者。豈士卒寡少而不足戰歟。器械鈍弊而不足用歟。抑爲城郭不足守歟。廩食不足給歟。此數者皆非也。

○廩食……倉の中に貯へてある食物。



○用……人材。

然所以弱而不振。則是無材用也。

返點附本文

夫今之所患兵弱而不振者。豈士卒寡少而不足使歟。器械鈍弊而不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>用歟。抑爲城郭不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>守歟。廩食不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>給歟。此數者皆非也。然所以弱而不振。則是無材用也。

讀方 それ今の兵弱くして振はざるを患ふる所の者は豈士卒寡少にして使ふに足らざるか、器械鈍弊して用ふるに足らざるか、抑も城郭守るに足らざるか、廩食給するに足らざるか、此數者皆非なり。然れども弱くして振はざる所以は、則ち材用なければなり。

解答 一體今の兵力が弱く士氣の振はないのは、どうも士卒が少くて使ふことが出来ないのであらうか、武器が鈍く破損して使用することができないのであらうか、或は城郭を守るだけの價值がないのであらうか、倉の中の扶持米が士卒に與へるだけなのであるか、これ

等のことは皆さうでない。けれども兵力が弱くて士氣が振はない理由は、立派な人材がないからである。

應用 求<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>與、與<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>與。

問 題

○<sub>不</sub>三 軾聞足下名久矣。又於相識處。往往見所作詩文。雖不多。

亦足以髣髴其爲人矣。

返點附本文

軾聞<sub>ニ</sub>足<sub>下</sub>名<sub>一</sub>久矣。又於<sub>ニ</sub>相識處<sub>一</sub>。往往見<sub>ニ</sub>所作詩文<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>多。亦足以髣髴其爲<sub>レ</sub>人矣。

讀方 軾足下の名を聞く久し。又相識の處に於て、往往作る所の詩文を見る多からずと雖も、亦以てその人となり髣髴するに足れり。

解答 私は足下のお名前を久しい以前から承つて居る。又知合の所で、時々足下の作られた

○髣髴……ぼんやりと眼前にあらはれて  
○爲<sub>レ</sub>人……性質



詩や文章を見た。澤山には見ないが、それでも足下の性質をそれによつてぼんやりと知ることが出来る。

應用 其爲人剛愎不遜。

問 題

【六十四】 夫言有大而非誇。達者信之。衆人疑焉。

返點附本文

夫言有<sub>レ</sub>大<sub>ニ</sub>而非<sub>レ</sub>誇<sub>ヲ</sub>。達者信<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。衆人疑<sub>フ</sub>焉。

讀方 それ言大にして誇にあらざるものあり。達者はこれを信ず。衆人は疑ふ。

解答 一體そのいふ所は如何にも大言壯語のやうに聞えて大言壯語でないものがある。廣く道理に精通した人は之を信用するが、多くの俗人は之を疑ふのである。

應用 柳下惠、東方朔達者也。

○夫……發語。  
○達者……廣く道理に精通した人

○朝廷清明……朝廷が明らかに治まり。

○百揆……すべての政治。

○時叙……正しく行はれる。

○異時……その後

○薄夫鄙人……薄情な人、賤しい人

○皆洗心易徳……心をよく改め、徳をよく改め

○務爲忠厚……忠厚で手厚い。

問 題

【六十五】 上即位之三年。朝廷清明。百揆時敘。民安其生。風俗一變。

○異時薄夫鄙人。皆洗心易徳。務爲忠厚。

返點附本文

上即位之三年。朝廷清明。百揆時敘。民安其生。風俗一變。異時薄夫鄙人。皆洗心易徳。務爲忠厚。

讀方 上位に即くの三年、朝廷清明、百揆時に敘づ。民その生を安んじ、風俗一變し、異時薄夫鄙人、皆心を洗ひ、徳を易へ、務めて忠厚をなす。

解答 哲宗が即位して三年目に、朝廷は明らかに治まり、もろくの政は秩序正しく、人民は安んじて業につき、習慣も今までと全く變り、まもなく、王安石に一味した小人共も汚れた心を清め、改心して、一所懸命に眞面目な手厚い行をするやうになった。



應用 海内清明

問 題

【六十六】孔子曰。剛毅木訥近仁。又曰。巧言令色鮮矣仁。所好夫剛者。非好其剛也。好其仁也。所惡夫佞者。非惡其佞也。惡其不仁也。

返點附本文

孔子曰。剛毅木訥近仁。又曰。巧言令色鮮矣仁。所好夫剛者。非好其剛也。好其仁也。所惡夫佞者。非惡其佞也。惡其不仁也。

讀方 孔子曰く、剛毅木訥は仁に近しと。又曰く、巧言令色は鮮し仁と。夫の剛を好む所の者は、その剛を好むにあらざるなり。その仁を好むなり。夫の佞を惡む所のものはその佞を惡むに非るなり。そ

○剛毅木訥……心がしつかりして操を守り、質朴で辯舌が下手でめぐることをめぐる。○巧言令色鮮矣仁……普通ならば「巧言令色仁鮮矣」と書くべき所を詭勢を隠すため倒装したのである。○仁……心の徳の修つて居ること。○佞……口さきの上手なこと。

の不仁を惡むなり。

解答 孔子が「心剛く、守る所あり、質朴で辯舌の下手な人は、心の徳の修つた人に近い」といひ、又「口さきが上手で、様子をよくして人の機嫌をとるものは心の徳の少いものである」といつたが、孔子が心の剛い人を好んだ理由は、其の心の剛いといふことを好んだのではなく、その心の剛い人の心の徳を好んだのである。又口さきの上手なものを惡んだ理由は、口さきの上手なことを惡んだのではない、口さきの上手なものはその心の徳が修らないから、その心の徳の修らぬことを惡んだのである。

應用 是故惡夫佞者。

問 題

【六十七】三代之盛時。天下之人。自匹夫以上。莫不務自修潔。以求爲君子。父子相愛。兄弟相悅。孝弟忠信之美。發於士大夫之間。而下至於田畝。朝夕從事。終身而不厭。至於戰國。王道衰息。

返點附本文

○三代……夏殷周三代。○四夫……只夫婦。○修潔……修養し



て。○君子……盛徳の人。  
 ○孝弟忠信……親に孝、兄弟に悌、君に忠、人に信、これに於て言行一致する。  
 ○士大夫……これには立派な役人は、田畝……田舎……百姓……は百姓……仁義の徳をもつて國を治めること。

三代之盛時。天下之人。自匹夫以上。莫不務自修潔。以求爲君子。父子相愛。兄弟相悅。孝弟忠信之美。發於士大夫之間。而下至於田畝。朝夕從事。終身而不厭。至於戰國。王道衰息。讀方 三代之盛時、天下の人、匹夫より以上、務めて自ら修潔して以て君子たるを求めざるなし。父子相愛し、兄弟相悦び、孝弟忠信の美、士大夫の間に發して、下田畝に至り、朝夕從事、身を終へて厭はず。戰國につ至て王道衰息す。

解答 夏殷周の盛な時には、世の中の人、賤しい身分のもの以上皆、一生懸命に修養して學問あり道理に明らかな人間になりたいと思はぬものはなかつた。父子互に愛し、兄弟互に睦ましく親に孝行をつくし、兄に對する道をつくし、眞面目に言行一致の美風が上流の役人達から出て、下に及び田舎の農夫にまでもその美風が行き渡つた。そして朝夕にこの美風を行つて一生少しも厭ふ所なく行つた。戰國の世となつて、仁義の徳を以て國を治める事がなくなつた。

應用 謙性忠直、善辭令

問 題

【六十八】 初公以楊國忠。斥爲平原太守。策安祿山必反。爲之備。

返點附本文

初公以<sup>レ</sup>件<sup>ニ</sup>楊國忠。斥<sup>ニ</sup>爲平原太守。策<sup>ニ</sup>安祿山必反。爲<sup>ニ</sup>之備。  
 讀方 初め公楊國忠にひふを以て、斥けられて平原の太守となる。安祿山の必ず反せんことを策り。これが備をなす。

解答 初め公は楊國忠に反對したので、朝廷から退けられて、平原の知事に貶せられた。安祿山が必ず謀反するであらうといふことを豫知して、これに對する準備をした。

應用 至言<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>耳

問 題

策……推量する  
 意見に反



- 慶實……倉の米
- 藏錢……倉の錢
- 累歲……何年も何年も
- 不<sub>レ</sub>發……出さない
- 施……人に與へること
- 何如……疑問の言葉

【六十九】富者兼田千畝。廩實藏錢。至累歲不發。然視捐一錢可以易死。寧<sub>レ</sub>無所捐。其於施何如也。

返點附本文

富者兼<sub>ニ</sub>田千畝。廩實藏錢。至<sub>ニ</sub>累歲不<sub>レ</sub>發。然視<sub>レ</sub>捐<sub>ニ</sub>一錢<sub>ヲ</sub>可<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>易<sub>ス</sub>死。寧<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>捐。其於<sub>レ</sub>施何如也。

讀方 富者田千畝を兼ね、廩實藏錢、累歲發せざるに至る。然れども一錢を捐するを視るに以て死に易ふべし。寧ろ死すとも捐する所なし。其施に於て何如ぞや。

解答 金持ち千畝の田を所有して倉の米や錢を毎年倉からとり出さなくてもよい位になつたけれども一錢でも失ふときは自分の生命を捨てるやうな氣である。むしろ死んでも一錢を失ふことをしないのである。まして人に施すなどといふことはどうであらうか。

應用 秦兼<sub>ニ</sub>并<sub>ニ</sub>諸侯山東三十餘郡<sub>ヲ</sub>

問 題

- 詆……惡口をいふ
- 信……本當らしくする
- 徒……仲間

【七十】世之論莊子者不一。而學儒者曰。莊子之書。務詆孔子以信其邪說。要焚其書。廢其徒而後可。

返點附本文

世之論<sub>ニ</sub>莊子<sub>ヲ</sub>者不<sub>レ</sub>一。而學<sub>レ</sub>儒者曰。莊子之書。務<sub>ニ</sub>詆<sub>ニ</sub>孔子<sub>ヲ</sub>以<sub>レ</sub>信<sub>ス</sub>其邪說。要<sub>ニ</sub>焚<sub>ニ</sub>其書<sub>ヲ</sub>。廢<sub>ニ</sub>其徒<sub>ヲ</sub>而後可。

讀方 世の莊子を論ずる者一ならず。而して儒を學ぶ者曰く、莊子の書、務めて孔子を詆り、以て其邪説を信にす。要するに其書を焚き其徒を廢してしかる後可と。

解答 世の中で莊周を論じるものは各自異つた論じ方をする。そして儒教を學ぶものは、「莊子の本には強ひて孔子を惡くいひ、自分の間違つた説を本當らしく説いて居る。つまり莊子の本を火中に投じ、その學を奉じるものをしりぞければよいといふて居る。」